

# 狂言

昭和42年1月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区奥門前町5ノ2  
 井上重兵衛方 電(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

## 狂言人語

明けましておめでとうございます。月日の流れは早いもの。「戦後」という言葉もすでに実感を持って響かなくなつた今日、この平和な新年を迎えるに当り、今一度遠く流れ去つた悪夢の日々の記憶を思い返しつゝ、遠く彼方

へ、斯界の隆盛も目に見えるものがあります。今後も回を重ね、ささやかながらも皆様のお手元に送り届けんものと思ひます。色々御指導御協力下さつた諸先生、楽師の方々並びに能狂言愛好者の皆様に感謝申し上げますと共にこれからもよろしく御指導下さる様、あらた

## 謹賀新年 狂言共同社

昭和四十二年元旦

の空に今なお響く砲火の音の一日も早くやまんことをあらためて祈りたいものです。

さて、小紙「狂言」もさゝやかながら皆様のお手元に送り届け始めて十年余となりまして。旧態然としたさゝやかなパンフレット、皆様の徒然に、お報せにと送り続けて参りましたが百号の声を聞くに当たり、今さらながら私達一同感無量の面持ちです。合せて、本年からは「能楽の友」も発刊されいよ

めてお願い致します。

### 一月の催能

一月八日 邦誦会

- |                   |           |                   |                   |                       |
|-------------------|-----------|-------------------|-------------------|-----------------------|
| 能 高 砂 浅井 宏丞 西村 欽也 | 能 間 佐藤 秀雄 | 能 羽 衣 鷲尾 周三 粉河 幹夫 | 能 末 広 井上松次郎 井上 義次 | 狂 二 部 膏葉煉 茂山 正義 茂山 真吾 |
|-------------------|-----------|-------------------|-------------------|-----------------------|

ましたか……。

### 狂言点心

野村 広二

新年おめでとうございます。

昨四十一年も、例年のように、多事な年でした。まづ、昨年も、一昨年にひきつづき、「老女物」が、東西で上演され、愛好者の注目を浴びました。名古屋では、卒都婆小町が二回、うち一回は能フアンの大衆を前に、中日五流能でおこなわれました。次は、能、狂言の一行が海外公演にでかけ、成果をあげたことです。狂言のインド行(東西演劇シンポジウム参加)と、宝生流能楽団のアメリカ大学巡演の二つです。またJ・P・サルトル氏とポーボール女史の観能と放送の能の話も特筆の一つです。海外には、今年も、北歐へ、橋岡久馬氏の世話で、観世流がでかける由。狂言は大蔵弥太郎・善竹忠一郎の両氏です。これにかける期待も大きいとおもいます。

### 狂言解説

末広主命で末広がりを買いに都へ上つた冠者、まんまとだまされて古傘を求めて来る。さあ主は気嫌をそこねてしまふが……。代表的脇狂言です。膏葉煉、都方の膏葉煉と鎌倉方の膏葉煉とが互の名声を聞き知り、日本一をかけて争うことになる。系図争いから実力の勝負となるが……。

筑紫奥、筑紫奥の百姓と丹波の百姓とが元旦に年具を納めに都へ上る途中で行合せ一詣に上る。この種の百姓狂言はいずれも目出度いものとされている。昆布売、太刀持の無いまま自身太刀を持った大名、通りがかりの昆布売を無り矢理おどして太刀持ちに仕立て上げ

- |                   |           |         |                 |           |                 |           |                 |           |           |           |           |           |           |           |           |           |
|-------------------|-----------|---------|-----------------|-----------|-----------------|-----------|-----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 能 舟弁慶 梅田 邦久 谷田宗二朗 | 能 間 茂山 正義 | 能 間 清韻会 | 能 間 赤間 鎮雄 高安 滋郎 | 能 間 佐藤 秀雄 | 能 間 川村 鉄雄 西村 欽也 | 能 間 稲生 義雄 | 能 間 井上 祐一 井上松次郎 | 能 間 井上 祐一 | 能 間 井上松次郎 | 能 間 西村 欽也 | 能 間 高安 滋郎 | 能 間 佐藤 秀雄 | 能 間 井上松次郎 | 能 間 井上 祐一 | 能 間 井上松次郎 | 能 間 吉田 俊彦 |
|-------------------|-----------|---------|-----------------|-----------|-----------------|-----------|-----------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|

国内では、梅若六郎氏の芸術院入りが報ぜられた、楽しい話題にひきかえ本田秀男氏の逝去は、痛恨事でした。佐野巖、森田光風両氏も鬼籍に入られました。名古屋では、今年も、道成寺が演ぜられました。狂言やハヤシ方青年楽師の一段の上達は、日頃の修練の賜物です。これをみなさんといっしよによろこびたい。なお一層の精進をのぞむのは、あながちわたくしひとりではないでしょう。青年諸君のあふれる気力は、一、二回の青年シテによる

観世流の充実ぶりを申し添えれば、能界にとつて「明るい将来が……」といえましよう。よい狂言や能も随分とありました。狂言は、やるまい会こそなかったが、朝日狂言会と、名古屋和泉会は、どちらも好演の番組がならんで、今年への期待をつなきました。大蔵・茂山・三宅氏たちの来名も鑑賞のよき対象。名古屋和泉流も、長老・中堅・青年の活躍はめざましく、狂言には幸運の年でした。能は、二十番はとりあげられます。

野宮(寿夫)、安宅(元昭)、大原御幸(元正・博太郎・元三郎、高安滋郎)に金剛嶽の三番(屋島・小督・山姥)。熊野(英雄)砧(猶義)、阿漕(六郎)、頼政(万三郎)、殺生石・本体(豊嶋)。それに誓願寺(鎮之丞)と卒都婆小町(金春榮治郎)。名古屋勢は、朝日大衆能と若宮神社の大衆夜能で活躍しました。さて、秋の中世文学会で講演された高木市之助老博士の「私にとって中世的なもの」は、能界にも、観阿弥的と世阿弥的のものに対する老先生の深い洞察と広い展望が良き教示を与えるにちがいありません。また、藤井制心氏が井野川・土居崎・三品三検校と、十六年の才月をかけて平曲(平家物語)八曲を採譜、ついに「採譜本・平曲」が刊行されたことに敬意を表し、お祝いを述べたい。十一月からの催しは、琳派展覧会(徳川美術館)の光悦謡曲本(嵯峨本)とそれをおさめる簞笥(たんす)の豪華な展示。カラー映画「能」(水の江プロダクション制作・芸術祭奨励賞受賞、名古屋市教委と朝日)。木彫「能の若い女」(日本伝統工芸展、作者未詳、オリエンタル中村)など。放送は、三本のカラー、二人静(六郎・雅俊)、松風(蒼

多美、狂言集争(このみあらそい、大蔵流)に道成寺(寿夫、いづれもNHK)。本では、「古文芸の論」(高木市之助、岩波、重版)ほか。  
今年の能界には、狂言や能の徹底的な探求をお願いしたい。これはやさしいようでむづかしいとおもいます。さあ、今年もよい狂言や能をうんとみせてもらいましょう。

「天正狂言本」拾い書き

廃曲となった狂言の於母影  
その三  
佐藤友彦

所で「宮座」は神社の祭礼の一部をその氏子の村会で分担することから始められた。種々の役割が各氏子の村に分担され、年々芸能を奉仕する村が生まれ、それはその村の伝統となる。現在でも「田楽村」等の呼称が行なわれている所もあり(近江国蒲生郡馬淵村の馬見、岡神社)。また山城国綴喜郡宇治田原村の御栗栖神社には明確に「田楽座」という呼称が、行なわれている所である。(林屋辰三郎「歌舞伎以前」岩波新書による)。当初は祭礼一日のために氏子達は練習し、舞台上に臨んだのであろう。やがてこれらの芸能を受持った村の中にも他村にまでその祭礼の、芸が評判されるものが出て来る。すると、他村の神社の祭礼にも招かれて出演し、謝礼を受取る様になる。即ちこうして座が専業の芸能集団として成長し始めることになるのである。一二七一年山城国綴喜郡多賀郷の高神社の宝堅(猿楽)が行われ、「一村の神事に散楽(猿楽)が行われ」「一村紀州石王権守、一村、宇治若石権守、

各々能を競ふの間尤も其興有り」と同社の流記に見えている(前記「歌舞伎以前」)。これも本来は散楽をもって奉仕するはずの二村が専業集団を求めて紀州、宇治から各々招いたものであろう。  
この様にして専業集団たる芸能の座は次第に横のつながりを広げ、種々の集団を吸収、統合したりしながら成長して行った。もと／＼は地方の神社、所謂鎮守の社の祭礼に芸能を奉仕する性格のものから、やがて中共社寺の保護を求め、これらの社寺を本所として楽頭職を与えられ、近畿一円に、勢力を張りめぐらすにまで成長するのである。即ち大和の国の外山(宝生)・結崎(観世)、坂戸(金剛)、円満井(金春)の四座、及び近江の国の山階、下坂、比叡の三座が、その有力なものであった。  
尤論、種々の先行芸能を母体とする能狂言をこの様な座の図式で述べることが出来ない。この他にも数多くの芸能集団——これらの多くは多分、座としての緊密な組織を形成するに至らず四散していったのであるが、例えば法師形をした田楽法師達の群れや、或いは後に詳しく触れねばならぬが、京の河原に巣くっていた賤民達の群れ、その他数多くの芸能集団が彼等に少なからぬ影響を与えたはずである。  
所で「座」の問題は今少しおいて、本題たる「百姓狂言」に話を戻そう。「百姓狂言」は云うまでもなく登場人物は百姓であるが、この他にも狂言には数多く百姓、農民の登場するものがあり、その姿は多種多様であると云える。今一度これらを少し整理して見よう。(現行狂言について)

賀正

ふぶや

河文  
電話代表(3)一三八一番

トヨダビル店

大名古屋ビル店

とてな

船津屋  
電話桑名代表(2)一八八〇番

上る百姓。これだけは「是は某園のお百姓でござる」と名乗る。「餅酒」「三人夫」など、さらに「三人長者」もこの類に入る。

第二类……「瓜盗人」「水掛舞」「内沙汰」「竹の子」など登場人物、舞台とも農村に求め、文字通り農民の風俗事件を扱ったもの。

第三類……農民の生活に舞台を求めるが、登場人物が土着の名主階級とその下人であるもの。「鳴子」「狐塚」「縄なひ」など。

第四類……都へ上った田舎人の類。これは非常に数が多く、主命で上る田舎者の冠者（「末広」など）、奉公先を求めて上る奉公人（「文相撲」など）また一在所の代表として上る田舎人（六地藏）など、永々在京する大名も地方に下れば第三類と同様の農村生活が待っている（「鬼瓦」など）。

こうして便宜上分類して見ると第一類に属する狂言が以外に少ないのに気が付く。しかも、この中で直接農民の農耕生産をとり上げたものとなると全く少ない。確かに、「水掛舞」「竹の子」「内沙汰」などに見られるのは、しばしば指適されている様に、農村の中にこの時代（室町初期頃）になって新しく起って来た所有関係、人間関係に題材を求めている。しかしだからと云ってそこに問題を据えて農村の現実の姿をまともに掘り下げて行く姿勢があるかと云えばそうは云えない。それがおもしろい事件だから取り上げたにすぎないのである。つまり古代荘園制の重圧からその解体へ、鎌倉の古代封建社会の解体と南北朝の内乱を通じて農民達が次第に勝ち取り、護り抜いて来た自らの生活、こうした態度に裏付けられた精神がそこに反映されてい

るといふ。さもないのである。尤論時代の激しい流動の中に消えて行った多くの狂言の姿が明らかにされてきたことは殆ど不可能と云えるが、現行狂言の中にはどうした態度が、高い農民達の精神が見られないことは事実である。ともかく生活の中にたま／＼起ったおもしろいおかしな事件、風俗を興味深くながめ、観察し、劇として現実の姿を多く誇張して取り上げる程度で、あくまで現実の徹底的追求を避け、写實的に描きはしても、それが劇構成の上で興味ある部分に限り「竹の子」の所有権争いにしては結局その勝敗を決するに和歌を競い合うというおおよそ農村生活から離れた非現実的構成を作り出している。この傾向はやはり、第二类でも全く同様のことか云えるだろう。

さて第三類の田舎人をながめて見ると、こゝでは全く農耕生産という生活からは離れて都との関連に於て初めてとらえられる。もっと云えば都人との関連である。つまり都人の眼に写った田舎人という点である。こゝでは田舎人は常に愚鈍で単純でお人好しで都の者にだまされる。もっとも磁石などは例外的。田舎人は笑いの対象という明確な存在意義を与えられる。つまり、いづれの農民の姿にしても、それは笑いの題材を提供してくれる限りに於てしか描写されない。そこに農村の風俗、純粹に農村を舞台にしたものが少ないことがうなづけるであろう。農村にいくまで腰を据えてその現実を描き出す態度とは明らかに異なるのである。農民達を笑いの提供する人物として都へ上らせる事の方が手取り早い。せい／＼農村ではたまたま起った事件、おもしろい風俗程度しか狂言の題材にならなかつたのである。そこに、狂言の

人間劇としての限界。つたと云えよう。こうしたことが一方では狂言がはや農村出身でありながら農村のものではなくなりつゝあることを暗示している。農民を扱った多くのものが都人との関連で捉えられ、しかも常に都人の笑いの対象として描かれていることまた前者と比べたら意外な程少ない農村を舞台にした狂言がたゞたま／＼起った面白い事件を興味深く観察者として眺めるにとどまっているということにすぎない。逆に農村とは全く無関係な都だけの生活を劇化したものを考へるとむしろ第一類の狂言よりその数は多い程である。即ち祭の山車の相談、寄合（くじ罪人など）物競いなどの寄合（「止動方角」など）その他、野遊び、遊山に行く主従、友人達も都の生活を表わすものである。これらが農民達の手で、農民達の意識で都の生活を観察しつゝ作られたというのは当然の事。むしろ農村の生活を都人に近い立場にある人が都人の眼で眺めたとする方がより自然であろう。また他に登場人物として扱われる市の商人（「牛馬」など）行商人（「晝布売」など）その他山伏、盗人、はては鬼や閻魔大王までも笑いの提供者として彼らの生活を描く態度と前者のそれとを比べて見ると、これらの農民達の姿に接する態度は何ら異なる所がないのである。勿論これら幅広い底辺の群衆に対する連帯感の様なものがうかがわれることは事実である。そしてそれは狂言作者が、又狂言の享受者がこれらの階層に属していたことを表わすものに他ならない。

所でこうした農民及び農村の生活を扱った第一類から第三類までの狂言と

第四類の狂言、即ち百姓狂言の百姓との間には、私は全く異質なものを感じます。まず第一に考えられるのは、これらの狂言の劇的構成が全く稀薄であるということである。能があくまでシテを中心として歌舞にしばらく、主要人物は一人である方向をとったのに対し、狂言は対話で進行することに劇の出発点を持った。しかもそれは当初は三人という形式をとったと思われる節が見られる（本紙第九〇号参照）。しかしこれらの百姓狂言に見られる人物対立に於けるつっこみ方は全く足りない。事件らしい事件はなく、どれもこれも上頭や年貢を納めてめでたく帰るといふだけであり、他の百姓の登場する狂言の様な笑いを追求する態度はうかがうべくもない。唯一の例外とも云えるのが「佐渡狐」であるが、これはむしろ後の時代の改作とも云うべきで、単調な筋立てが意味を失った結果、飽きられた、劇的破綻を求めて新しく作られたものと云えるであろう。何時頃作られたものかは勿論不明だが、江戸初期の古台本には大蔵流、和泉流共に本曲は見つからない。天正本は無論である。それにしても「三人夫」「餅酒」以下十番余もこの全く同じ筋立ての狂言が今日残存するのは長い狂言の流動の歴史の中でも、異例だと云わねばならぬ。その残存については色々考えられるのであるが、私は前号でも触れた様にこの百姓狂言の姿こそ、最も原始的な狂言の姿だと信ずるものである。

この中には農民の姿にかすかなユーモアは認められるにしろ、皮肉や諷刺百姓を笑いの対象としている所はどこにも見られない。しかしながら、彼らが喜びの気持をいっばいに表わしなが

ら無事年貢を納めて故郷へ帰ると云つた点をとらえ、権力者に対する追従の姿ときめつけるのは当たらないであろう。彼等のどこにも卑屈な態度は見当たらない。御前をはばかり大笑して笑われたり、御前で二人の百姓が口論したり、常に百姓達はどこへ出てても自由であり、明るく健康的でさえある。この姿を、どの様に受けとつたら良いのか。私はそれをしばしば述べて来た「宮座」と云う舞台に於いて初めて考えられるべきだと思う。

即ち神に対して村民の願いを込めて自らの生活を表現する。対象は人ではない。神なのである。超自然の神の前には農民も領主も自由である。神の御心を慰め、農民達の素朴な願いを彼等は表現した。現実の姿が悲惨であればある程彼等はひたすら願ひ続けた。農民の素朴な願ひ、彼等の唯一の夢は豊作と無事年貢を納めること、そして、願わくは万難公事を免れることであつた。彼等の芸能は現実の姿を見つめることではなく、伝統的に神に願う姿なのである。しかしながら古代社会の崩壊と南北朝の内乱、こうした社会の大きな変動は、彼等の眼をいやでも現実の社会にひきずりおろさずにはおかない。即ち百姓狂言の「お百姓」達は神の国から現実の社会に位置づけられた百姓へとここに大きな変貌を遂げることになり、狂言は大きな転機にさしかかるのである。

この決定的な転機を迎えた狂言の大きな可能性の光こそ前号「木のへ殿の申ぢやう」という幻の狂言だと云えよう。「お百姓」は自らの意識変革神の世界から現実の世界へという極めて低次元ではあるが——を成し遂げることなしには決して左衛門尉として生れかわらなかつたと云えよう。

この後専門化集団の手に上演が移るに依り、農民の笑いから次第に都人達の笑いへと移り変りを見せ、やがて能と並演される様になると狂言はその大きな可能性を自から閉ざしてしまふことになるのである。

二月の予告

二月五日 梅嶺会

二月十一日 名古屋金春会

二月十二日 青陽会

二月十六日 名古屋金春会

二月十九日 観世会定式能

二月二十六日 たなびき会

二月二十六日 大槻 秀夫

二月二十六日 林喜右エ門

二月二十六日 野村又三郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

二月二十六日 井上松次郎

協会よりの御報せ

天野 秀男氏	唯子披	稻生社中
増田 保雄氏	能禪丸披	杉村社中
杉村 蓉子氏	能狸々披	杉村社中
角野 博久氏	唯子披	杉村社中
野口 清氏	素謡披	杉村社中
大西 鐘八郎氏	素謡披	杉村社中
森 子氏	素謡披	杉村社中

新年賀謹

一	邦	藤	長	中	竜	観	霞	潤	観	観	高	た	高	調	名
河	梅	加	鬼	前	藤	田	田	林	野	久	高	田	内	友	鍋
村	田	藤	頭	田	田	鍋	鍋	甲	崎	田	安	鍋	藤	友	惣
鉦	邦	良	八	昌	兵	惣	惣	子	太	秀	滋	惣	泰	友	惣
二	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会	会

名古屋能楽俱樂部	植村 真太郎	風韻会	殿島 修二	幸友会	福井 啓次郎	金剛流松風社	片野 東四郎	掬水会	柴田 初太郎	曲水会	増田 一雄	春鶯会	山田 仁三郎	正楽会	加藤 丈太郎	松謡会	佐藤 太俊	清風社	大塚 一	掬水青陽会	協会 名古屋支部	支部長 田鍋惣太郎	名古屋和泉会	狂言 共同社
----------	--------	-----	-------	-----	--------	--------	--------	-----	--------	-----	-------	-----	--------	-----	--------	-----	-------	-----	------	-------	----------	-----------	--------	--------

# 狂言

## 狂言人語

北陸、東北地方は例年になく大雪のこと、こゝ東海地方まで、厳しい寒さが続くことでしょう。それでも早朝の窓を開け、朝の冷気を胸一杯に吸い込み、霜の真白に降りた庭に降り立つ時、冬の朝のすばらしさをしみじみとかみしめることが出来るものです。厳しいまでの静寂、思はず身のひきしまる様な冷気、そして腹の底まで清められる様な澄んだ空気が、おのずとそこに能の世界に通ずるものが感ぜられ、「あゝこゝにも能の世界がある」と思わすうれしくなります。

さて新しい年の出発にふさわしく一月はたくさんの会が私達を楽しませてくれましたが、この月も梅猶会、金春会、観世会と続々好番組をそろえて開催されます。きつと皆様の御満足行く月となることでしょう。御期待下さい。

## 二月の狂言

二月五日 梅猶会 午前十一時始  
 能 隅田川 梅若 鶴義 高安滋郎  
 能 小銀治 岡田 朗詠 西村欽也  
 狂 素袍落 井上松次郎 佐藤卯三郎  
 井上礼之助  
 二月十一日 名古屋金春会 一時半始

昭和42年2月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区奥門前町5/2  
 井上重兵衛方 電(321)1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電(541)4881

能 葵上 金春 信高 高安 滋郎	狂 因幡堂 井上祐一 佐藤 秀雄	能 二月十二日 青陽会 柴田 収武 高安 滋郎	能 後 寛 佐藤卯三郎 西村 欽也	能 鞍馬天狗 塚本 秀雄 西村 弘敬	能 空 井上 祐一 井上松次郎 友彦	狂 二月十九日 観世会定式能 井上礼之助 十一時始	能 屋 島 観世 寛之 西村 欽也	能 花 佐藤 友彦 高安 滋郎	能 野 守 観世 元正 高安 滋郎	能 節 分 井上松次郎 井上 祐一	能 二月二十六日 たなびき会 別会	能 求 塚 大槻 秀夫 西村 欽也	能 安達原 林壽右エ門 高安 滋郎	能 泉山伏 野村又三郎 井上松次郎 井上 祐一	井上 義次
------------------	------------------	-------------------------	-------------------	--------------------	--------------------	---------------------------	-------------------	-----------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------------	-------

## 狂言解説

素袍落||伯父の所へ使いに行つた冠者酒を存分にふるまわれ、その上素袍までもらつてよい気遣で帰る途中、様子を見に来た主に出くわします。あわてて素袍をかかすのですが……。歌舞伎にもとり入れられて有名な狂言です。

空腕||大ぼらばかりふくくせに空つき

し意気地のない冠者、日は夜道を淀まで使に行かねばならなくなりまして。重代の主の太刀を借りて行くのですが、おっかなびっくり、様子を見に出かけた主をとう／＼山賊と間違え刀をさし出し目を廻してしまいました。さあ、帰つて太刀の言いわけをするのですが。

節分||節分の日にはるる蓬来の鳥から日本にわたつた鬼、入り込んだ家の女を見そめ、妻にすると迫ります。狂言には多くのいかつい姿形の鬼が登場しますが、大ていなりだけでどこかぬけており、お人よしで愛すべき鬼達です。

泉山伏||山から帰つた弟の様子がおかしいので、たつと山伏に一祈りしてもらおうと山伏を連れて来ます。よくよく調べて見ると鼻にとりつかれたとすること。さっそく山伏は祈り落そうとするのですが……。

## 狂言同異

野村 広二

正月に飾つた白い梅が十五日すぎよやく三つほころびた。一重の福寿草も時を同じく三つひらいた。梅の白と福寿草の黄と山茶花の紅が、いまわが家のいろどりです。今年になって、月末まで、熱田の能楽殿を訪ねない。こんなことでどうするかとなまげ心を叱咤(しった)しながらも、ついこたつに入つて、ぼんやりガラスごしの外をながめることから抜け切れない。それでも、二日の日には、二・三の本を読む。まづ谷川徹三先生の「芸術と宗教」。キリシタンが栄えたころ、島原あたりでいろいろの書物が出版されたが、その頃の訳語では今の「愛」とい

っているものを「お大切」と訳している。神の「愛」は「でうすのお大切」である。芸術とはいかなる存在をも神の目をもって大切にすることであるというのが結のことば。

次に「芭蕉」。島崎藤村の「飯倉だより」の中の文章。芭蕉が「閉関の説」に曰く、色は君子の悪むところにして仏も五戒のはじめに置くといえども、流石に云々のあたりは声をあげてよむ。そして、龍井孝作氏の「初心」の二字をみておわる。放送は奥によくみよくきいた。年末に「管絃・越天楽残楽と声明・三十二相と大般若転読会」。

これは国立劇場の公開演奏の録音。今年の「翁」は観世流。喜多実の「氷室」もあれば、狂言で、「末広」(藤九郎)「弥宜山伏」(千作、千五郎、千之丞)をみ、「麻生」(万蔵)「千鳥」(忠一郎、忠三郎)などを、きいた。それに「西行桜」(近藤乾三、以上いづれもNHK)「熊野」(宝生英雄、CBC)もあつた。本では、「春日若宮おん祭」日本芸能史の展示(倉林正次、朝日ジャーナル)「一五」「羽衣」(野村蘭作、花椿一月号)「声明音楽の現代性、東京にきた壬生狂言」(芸術新潮一月号)「芝居と笑ひ」(福田恒存、北国新聞一・一七)「翁」(出岡実画、放送芸能一・一)など、

二月の狂言は「節分」など四番、期待したい。

## 井筒の能

西村 弘敬

井筒の能は「風吹けば沖津白波立田山 夜半にや君がひとり越ゆらん」という小歌を基台にして作られて居る様に思われる。而して其人物は在原の

業平と紀の有常の娘となつて居り、又一方業平の通つた(かよつた)先は河内の国高安の里となつて居る。業平は此歌によつて其女が少しも嫉妬の心がなく素直に優しいのを感じて河内通いを思い止まつたという至極美しい物語に作られ、文章節付け型どころ誠に優美にて代表的の三番目物として人々に好かれて居るものである。

然るに之れの原因とも思われる伊勢物語や大和物語や謡曲高安などを見るに之れとは少々違ひもあり、みにくい点やら不合理の点がある。然し謡や能を嗜む上には別段そんな事はどうでも良い事であるが、此の能の裏面にはいろいろの話がある。先づ業平御二人の住んで居た石上(いそのかみ)と業平が通つて行つた河内の高安とは信貴山や立田山を隔て、約六里以上の道のりがあり、之れを夜中に一人で歩いて行くなどは到底出来得る事ではない。之れが第一の不合理の点である。次に伊勢物語の第二十二段に「風吹けば」の歌の出で居る物語には在原業平紀の有常の息女などと名前を出して居らず、男は田舎を行商して渡世をして居る人の子供とある。そして男より「筒井筒井筒にかけしまろがたけ」の歌を送り、女よりは「くらべこし振分け髪」の返歌をして結ばれて後、女の家が貧しくなりかけたので河内の国の方で女が出来て其方へ通つて行つたが、元の女が一向嫉妬する様子がないので或る時河内に行く様子にひそかに前載(せんざい)の中にかくれて若しや他より男でも来るかとうかがつて居たところ、女はよく化粧して外面を見やり「風吹けば」の歌を口ずさんだのを聞き、女の優しい心にひかれて通いをやめたのである。又大和物語の方では大体之れと同様であるが男女は大和の国葛城の郡

の者として名前を出してない、而して前記同様河内へ行くふりをしてひそかく泣く臥床に入り「かなまり」(多分金だらひならん)に水を入れ之れを自分の胸の上に握へて居たれば、思いの炎の為め其水が沸きたがり水を取替へては臥して居るのを見て男は走り出でて漸く女をなだめた様に出で居る。随分思い切つた極端な表現であつて思はず苦笑の禁じ得ない次第である。又高安という謡の中にも之れと殆んど同様の事があり「ひさげの水のわかかへり」などの句が曲(クセ)の中にかかれて居る。こんな事は謡を謡ふ上には何等の關係のない事柄ではあるが井筒の謡につながつた話であるので何かの参考迄に記しました。

追記

小紙「狂言」も年を重ねること十年余、危なっかしい足取りながら歩み続けて参りました。そして今年の九月号が数えて丁度百号ということになりました。そこで編集部としては、これを新たな飛躍への第一歩とするべく百号記念として名古屋の狂言の特集号といったものを企画しております。

尾張候のお抱えとして和泉流の流派としての形成を成し、維新、宗家の上京そして在名弟子達の共同社結成から今日まで、名古屋の狂言の歴史を中心として今日の発展の跡をさぐりつゝ、合せて今後の狂言の進むべき道を追求する一助となつたいと考えるものです。どのようなものが出来上がるかわかりませんが、よろしくお願い致します。

三月の予告

三月五日 九泉会

能 唐 植村真太郎

能 卒塔婆小町 伊藤 秀雄

能 道成寺 吉田 妙

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 佐藤卯三郎

能 大刀奪 井上礼之助

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

能 大刀奪 井上松次郎

重要無形文化財  
中日五流能  
昭和四十二年三月二十六日(日)  
於 名古屋市栄東 中日劇場  
第一部 午前十時開演

田 村 高安滋郎

長床 清経

観世鉄之丞

楊貴妃 森 茂好

花月 桜間龍馬

船弁慶 片山博太郎

野口緑久

宝生英雄

鼓 久保田直亮

西川道雄

清 森 茂好

玉之段 梅若猶義

通小町 柴田初太郎

笹之段 山田仁三郎

寝音曲 辰巳孝

梅若景英

野 久保田直亮

誦次之伝 村雨留

喜多長世

大江山 高安滋郎

附祝言

主 催 中 日 新 聞

後 援 文部省、文化財保護委員会

入場料二〇〇〇、一五〇〇、一〇〇〇、五〇〇(全部指定席)

出演能楽師、名古屋市内各ブレイガイド

中日新聞各地本支社で取扱

# 狂言

# 言

### 狂言人語

暖かくなりました。三月の声を聞く  
と吹く風がどんなに冷たかろうと、朝  
夕の冷えこみがどんなに厳しかろうと  
「春だ」という気がして来るから不思議  
なもの。能楽殿へと通ずる神宮  
の参道にも、春はもうそこまで来てい  
るのが知られます。

三月の催能は恒例になった中日五流  
能を初め、名匠鑑賞能等が豪華な番組  
を取り揃えて催されます。御期待下さ  
い。

所で毎年上半期の催能の最後を飾っ  
て開催される「朝日狂言会」の番組が  
このほど決定致しましたのでお報せ致  
します。

(和) 孫 舞 佐藤卯三郎 井上松次郎  
井上友彦  
井上義次

(蔵) お茶の水 茂山忠三郎 茂山 正義  
茂山 千作

(和) 朝比奈 佐藤 秀雄 井上礼之助

(蔵) 縄 糸 茂山 千作 茂山 正義  
茂山 忠三郎

(和) 煎 物 和泉 保之 井上松次郎  
野村又三郎 他

大蔵流茂山千作師らをお迎えしての  
「縄糸」等、また和泉流「孫舞」並び

昭和42年3月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町5/2  
井上重兵衛方 電(321) 1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

に「煎物」は全く珍しい曲の上演で、  
まず御覧になられた方は当地にはいら  
っしやらないはず。今年も共同社全員  
の総出演で和泉宗家のもと、大いにが  
んばって勤めたいと思っております。  
乞、御期待。

### 三月の催能

三月五日 九阜会	能 店 植村真太郎	能 卒塔婆小町 伊藤 睦子	能 道成寺 吉田 妙	能 三月十二日 観音会	能 隅田川 鈴木きくゑ	能 船弁慶 大村 恵美	能 成上り 井上 祐一	能 三月十九日 名匠鑑賞能	能 忠 度 野口 緑久	能 間 景 清 宝生 九郎	能 間 黒 塚 宝生 英雄	能 間 素袍落 井上礼之助	能 三月二十一日 金森進三師追善能
	井上松次郎 佐藤 秀雄	伊藤 睦子	井上松次郎 井上礼之助	観音会	鈴木きくゑ 高安 滋郎	大村 恵美 西村 欽也	井上 祐一 井上松次郎	名匠鑑賞能	野口 緑久 西村 欽也	井上 祐一 高安 滋郎	宝生 英雄 高安 滋郎	井上礼之助 井上松次郎	金森進三師追善能
				午前十時始			午後一時始						午前九時半始

能 翁 久田秀雄	能 鶴 河村 鉦二	能 乱 伊藤齋奈子	能 天 鼓 赤間 鎮雄	能 融 富士道周明	能 石 橋 佐藤 太俊	能 しびり 井上礼之助	能 三月二十六日 中日五流能	能 田 村 金剛	能 間 楊貴妃 観世鉄之丞	能 綾 鼓 宝生 英雄	能 間 猿座頭 茂山 千作	能 景 清 西川 道雄	能 熊 野 梅若 六郎	能 間 大江山 喜多 長世	能 寝音曲 茂山 千作
面箱 井上義次	千歳 松井省吾	西村 欽也	西村 欽也	高安 滋郎	高安 滋郎	佐藤卯三郎	中日劇場	高安 滋郎	森 茂好	久保田亘亮	茂山千之丞	森 茂好	久保田亘亮	高安 滋郎	茂山 忠三郎

### 狂言解説

太刀奪||冠者を伴って外出した主に太  
刀がないのはやはり外聞の悪いもの。  
「天下泰平の世に太刀はいらぬ」など  
と強がりやを云いますがその実……。  
そこへ丁度立派な太刀を持った奉公人  
が通りかかりました、さあおっちょこ  
ちよいの太郎冠者がこの太刀を奪おう  
とするのですが……。  
成上り||北野へ参詣に出かけた主従。  
通夜をする間に冠者は主からあづかっ

た重代の太刀をスッパに青竹とすりか  
えられてしまいました。さあ、目をさ  
ましてびっくり、この云いわけには……。  
……。  
素袍落||伯父の所へ使いにかけた冠  
者、酒を存分に振舞われて、その上素  
袍までもらってよい気嫌で帰る途中、  
様子を見に来た主に出くわします。あ  
わてて素袍をかくしたのですが……。  
歌舞伎にもとり入れられているおめで  
たい狂言です。  
しびり||和泉の堺へ酒の肴を求めに行  
けと仰付けられた冠者、それがいやさ  
にしびりが起って歩かれぬと座り込ん  
でしまいました。不審に思った主は一  
計を案じて……。  
三番叟||能の「翁」に於て三人目に狂  
言方の勤める三番叟が登場します。躍  
動的な「揉の段」そして黒式尉の面を  
つけ、面箱から鈴を受け取って壮重な  
「鈴の段」を舞ってこの「翁」全体が  
壮麗な祈禱の儀式と云えますが、特に  
三番叟には「鳥飛び」「種蒔き」等の  
型があり、農民の農耕生産との関連が  
うかがわれるものです。  
猿座頭||盲人の不具者が妻を連れて花  
見に出かけ、酒盛りをしています。そ  
こへ若い猿引きが猿を連れて通り合  
せ、この妻を誘惑し、二人で逃げてし  
まいます。さあそれを知らぬ座頭は残  
された猿を自分の妻だとばかり思っ  
ているので……。  
寝音曲||冠者が謡の上手なことを聞き  
つけた主が、一度謡って見よと云いつ  
けます。度々謡わされては叶わぬと、  
女共のひざ枕でなければ声が出ぬと注  
文をつけたのですが、主は自分のひざ  
を貸すから是非共と云い、遂に冠者は  
主のひざ枕で謡うことになりました……。

狂言同異

野村 広 二一

二月も下旬になると、雲のゆきも何となく春めいてくる。その上旬、岐阜県G町をたずねる。今年、「花笠踊」のある八幡さまのまわりに先立つこと一週間。汽車がすすむにつれて、川をはさむ両側の山の、もう一つ奥の山に日の当るのが目を射る。杉や松の黄葉した冬の色にまじる山の緑は鈍い色合いで、その夕日のあたる遠山がとも心をとらえる。幼いとき、父とお宮や寺をたづねて夕方になると、西日が急に夕御飯を、旅宿を、また母をむしように恋しがらせたが、いまは、あの夕日をうけた、わづかにみえる山の峯々が初老の心をなごませる。狂言や能をみる心の流れと動きも、そういうものかも知れぬと、洋服のえりに深々とくびをうづめた。持参の本の一つ「ホメロスの世界」(藤縄謙三)に田中美知太郎氏の「日本のギリシャ研究は今ようやく三代目を迎えようとしている云々」のことばをよむ。「明治百年」を迎えるにあたって、能界も三代目の活躍をみる現在、役者も、みる者の側にも、いろいろの大事があったらうし、これからは危機が待ちうけているにちがいないとおもわれてならなかった。狂言をすること、能をすること、万事で、自分で解決せざるまい、押し通し、貫きとおすことです。

は井上松次郎。演者の心得からか、「みせる翁」でなく、「祈る翁」であった。もやのかかる、すがすがしい木立の間をとおって能楽堂に入ったせいもあるう。三番叟もよかった。さて、「観世」主筆の斎藤太郎氏がなくなられた由。あらためて名著「私は斯く能を楽しむ」をよみ返す。放送は、「殺生石・女体」(金剛巖、テレビ)、後シテはぜひカラーでみたかった。「節分」(万之丞、万作、ラジオ)、「教養特集、東洋の芸能」(元曲、能カブキ) (梅原猛ほか)、「日本の伝統」(道成寺乱拍子ほか、いづれもNHK)、「徳川の夫人たち」(二・四、NBN)。本では「引用の戒め」(世阿弥のことば) (朝日一・二六、標的欄)「能のふるさと」(三輪) (近鉄一月、月号掲載)「解釈と鑑賞」(古典と近代文学の架橋) (滝井孝作・節分ほか、二月)、「国文学五十年」(高木市之助、岩波新書、九〇頁)「国文学」(中世文学にあらわれた英雄像—英雄の類型) (謡曲の単体ほか、高木市之助、三月、佳篇)、「狂い花」(荒川竜彦英語青年二月)「特集松浦一氏を偲ぶ—思い出」(世阿弥ほか、久松潜一、英語青年四一・十二月)「黒川能をみる」(戸井田道三、中日二・一七)など、絵は日展の「道成寺」(勝田哲)と「黒川能」(森田茂)。

三月は金森準三追善会。佐藤友彦青年の三番叟に期待したい。

四月の予告

能	四月一日	日本医学会総会能楽会
能	土蜘蛛	佐藤 豊次 高安 滋郎
能	四月二日	野村又三郎
能	梅猶会	
能	四月三日	梅若 猶義 西村 欽也
能	衣梅若 猶義 高安 滋郎	
能	四月四日	梅若 猶義 高安 滋郎
能	野村又三郎	
能	四月五日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月六日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月七日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月八日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月九日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十一日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十二日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十三日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十四日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十五日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十六日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十七日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十八日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月十九日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十一日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十二日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十三日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十四日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十五日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十六日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十七日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十八日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月二十九日	野村又三郎
能	野村又三郎	
能	四月三十日	野村又三郎
能	野村又三郎	

酒 味 噌 商  
た ま り  
食 料 品  
**む と う 食 品 店**  
名古屋市昭和区川名本町1ノ10  
電話 (五) 6 2 6 4 番



# 狂言

## 狂言人語

桜便りのチラホラ聞かれる陽春の候となりました。四月の風と共に演能も盛んになります。今月は福井初太郎・五郎師の追善能の豪華番組を切りとして、六回の催能があります。御期待にそえるすばらしい芸術が華を咲かす事と存じます。

収入に追越す物価高、何やらモヤ／＼と政界にたゞよう暗い霧、火付けともみ消して両方から金をとり入れたとか云う話とか、何かしらわづらわしい世の中と思えますがこんな時こそ、舞台に情熱をぶつける、能の綜合芸術に心を清めましょう。

五月やるまい会で野村万藏氏の好演を觀賞されさらに大蔵流の茂山千作氏の「お茶の水」「繩綱」をお目にかかる朝日狂言会にぜひ御期待下さい。

## 四月の催能

- 四月一日 日本医学協会能楽会  
能 土蜘蛛 佐藤 豊次 高安 滋郎  
四月二日 梅猶会  
能 羽衣 梅若 猶義 西村 欽也  
能 葵上 梅若 猶義 高安 滋郎  
野村又三郎

昭和42年4月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町5-2  
井上重兵衛方 電(321) 1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
有限会社安井印刷所 電(541) 4881

- |                     |         |                    |              |                     |         |                   |              |                     |         |
|---------------------|---------|--------------------|--------------|---------------------|---------|-------------------|--------------|---------------------|---------|
| 狂 泉山伏 野村又三郎         | 能 井上 祐一 | 狂 四月九日 邦誦会         | 能 梅田 邦久      | 狂 四月十六日 観世会 正午始     | 能 井上松次郎 | 狂 船ふな 井上 義次       | 能 西村 弘敬      | 狂 四月十六日 観世会 正午始     | 能 西村 弘敬 |
| 狂 四月十六日 観世会 正午始     | 能 西村 弘敬 | 狂 船ふな 井上 義次        | 能 井上松次郎      | 狂 四月二十三日 観正会        | 能 井上松次郎 | 狂 紅葉狩 星野 路子       | 能 佐藤 秀雄      | 狂 四月三十日 福井初太郎 追善華友会 | 能 井上松次郎 |
| 狂 四月三十日 福井初太郎 追善華友会 | 能 井上松次郎 | 狂 竹生嶋参 福井初太郎 追善華友会 | 能 井上松次郎      | 狂 第一 午前十時始          | 能 西村 欽也 | 狂 經政 辰巳 孝 西村 欽也   | 能 近藤 緑久 森 茂好 | 狂 四月三十日 福井初太郎 追善華友会 | 能 井上松次郎 |
| 狂 第一 午前十時始          | 能 西村 欽也 | 狂 經政 辰巳 孝 西村 欽也    | 能 近藤 緑久 森 茂好 | 狂 四月三十日 福井初太郎 追善華友会 | 能 井上松次郎 | 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一 | 能 井上松次郎      | 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一   | 能 井上松次郎 |
| 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一   | 能 井上松次郎 | 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一  | 能 井上松次郎      | 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一   | 能 井上松次郎 | 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一 | 能 井上松次郎      | 狂 竹の子 佐藤 秀雄 井上 祐一   | 能 井上松次郎 |

## 狂言解説

泉山伏山から帰った弟が物の怪にとりつかれたので、さっそく行力の強い山伏に頼んで祈禱してもらうことになりました。所か物の怪は実は執心の深い泉で……。

舟ふなII西の宮へ出かけた主従、渡し舟を呼ぶとて、二人の間に「ふね」か「ふな」かで議論になります。互いに古歌を引用してこの論争は……。

隠し狸II太郎冠者が狸を捕えたことを聞き付けた主、何とか白状させようとするので、冠者も仲々その手にのりません。主にかくれて市へ狸を売りに行った所を到々主に出くわしてしまいます。

竹生嶋参II主に無断で抜け参りをした冠者、散々に叱られてその後、主の気嫌を直そうと人の話をおもしろおかしく秀句を云うのですが、くちなわ（へび）の秀句でほうとつまってしまいます。

竹の子II隣のやぶの子が地面をくぐってこちらの畑へ顔を出したことから、その所有権をめくって両者の間に珍妙な論争が始まりました。さあ、この結末は……。

水汲II茶の湯の水を汲みに清水へ行くことを命じられた新発意、馴ちみの女、いちゃをなだめすかして汲みに行かせます。女が小節ももしくろく水を汲んでいると、掃除をすませた新発意がやって来ました……。

## 狂言同異

野村 広二

三月二十一日は故金森三（篤）追善能。M教授の教え子（佐藤友彦）が三番叟をつとめるので、おともで、早起し、熱田のもりにでかける。翁は久田秀雄。この「翁」は「きかせる翁」であった。翁がえりのあと、揉の段もすんで、三番叟が大小前にたち、面箱の役（井上義次）が橋掛を退場するあたり、なかなかすがすがしいふんい気。あえて佐藤青年へ、狂言をするのは、頭で考えただけですのではななく、心をぬり、カタチを正し、「流れ」をさとり、明るさと楽しさを求めることを、これから永い狂言の道を進むはなむけのことばにおくりたい。

ときにモダン・ダンスのようなかんじとうつうつとしたもやがからだをおおぎむすべからず。東門にかかるとき、うぐいすがなく。ことしも、昨年同様わが家の庭は、三月はじめから、一羽のうぐいすが日々たづねてくれる。桃もふくらみ、桜の花だよりも近いことである。

さて、二月のこと、観世会初会で「野守」を片山博太郎でみる。この日、京都物産展をひらく市内の百貨店で、銘菓の「京観世」を、約束しておいて買えず、きょうは二つの京観世で、舌の方には、味わいをこねたと家で笑ったがそれも、三月十二日、先代金剛嚴追善能に参会、買ってかえられた。名古屋ともゆかりの深い先代の十七回忌追善能、現家元は「邯鄲」をたむける。実に福々とした佳品。狂言は茂山千作親子孫三人で力のこもった「貰舞」だった。

名古屋では、「節分」（松次郎）「素

「袍落」(礼之助)。どちらもおとなしく、さらりとした味がよい。放送は「清水」(山本則寿、NHK)。本では、「日本文学入門」(吉田精一・森本治吉編、中世の劇文学・一一〇—一三頁、小峯書店)「喜多実」(杉本苑子、大法輪四月号)四月も多彩な演能月。期待したい。

かざし文句

西村 弘 敬

近来余り使われない言葉であるが、「かざし文句」というのがある。之れは謡の一部分の文句を一時的に替えて謡うので、婚礼とか又は特に目出たい折に不審を感じる様な文句は避けて、差障りのない句にして謡うという習慣から出たもので、一種の便宜主義とも見える仕方である。

例えば婚礼の席などでは、返る、出る、去る、などは禁句で其のかわりにして謡う文句を「かざし文句」と云うのである。之れと似た事で鉢木の謡の曲(くせ)の中にある「松は元より常盤にて、薪となるは梅桜切りくべて今ぞ」という句は本来の句は、「松は元より

和泉会おけい二便り

東海地区に誇る太平洋工業株式会社社長小川宗一氏夫人日出子さんは和泉宗家保之氏のお弟子として大垣和泉会の幹事大橋氏と共に熱心に芸事修業にいそしんでおられますがその華麗な舞姿を特におねがいして掲載させて頂きました。夫人は特に社会福祉に多大な関心をよせ

烟にて、薪となるも理りや、切りくべてて」であったのを、旧藩時代(徳川幕府の時代)に公儀(幕府)に遠慮して前の方の様に訂正して謡ったとの事で、之れは徳川家はもともと松平姓から出たので松という字を特に尊び、松が薪になって燃えるのを嫌って後の方の句は使わぬ様にしたとの事であった由である、只今でも流儀によって此の辺も幾分相違のある様に思われる、之れも一種の「かざし文句」かも知れぬと思う、又次に妾女(うねめ)の謡の初同の終りにある「のどけき影は靈山の、浄土の春に劣らめや」とあるのに大名の側室(おめかけ)の女に「おとらの方」というのがあって、其の目の前で「おとらめや」と謡うのはいかにも憚られるというので「浄土の春に劣るまじ」とかざして謡ったという話も残って居る。

五月の催能

- 五月三日 やるまい会
- 狂 佐渡狐 野村万之丞 野村 悟郎
- 野村 万作
- 狂 川 上 野村 万藏 野村又三郎

られ大垣市に青年の家を又日本福祉大学には学生図書館を寄贈されてその青年教育に対する熱意は頭の下る思いが致します。芸事についても深い御理解をよせられ仕舞に小舞にと多能振りを発揮されております。皆様もぜひ一つ如何でしょうか御入会をおすすめします。

- 狂 棒 縛 野村 万作 野村又三郎 悟郎
- 奈須之語 井上礼之助
- 狂 蝸 牛 野村又三郎 佐藤卯三郎 井上松次郎
- 五月五日 巽 会
- 能 胡 蝶 足立 尚子
- 能 玉 葛 平河 和子
- 能 羽 衣 玉井 弘子
- 五月七日 清韻会
- 能 千 手 泉 嘉夫 高安 滋郎
- 能 山 姥 大槻 秀夫 西村 欽也
- 狂 寝音曲 井上松次郎 井上 祐一
- 五月十三日 猶諷会 囃子会
- 五月十四日 霞 会
- 五月二十一日 一謡会
- 能 夜討曾我 河村 鉦二
- 狂 大藤内 佐藤卯三郎 佐藤 秀雄
- 五月二十八日 壺泉会

協会よりの御報せ

三番叟 披佐藤友彦氏 共同社社中



安田信託銀行

貸付信託 五年モノ 7分2厘2毛  
 予想配当率 二年モノ 6分3厘5毛

名古屋支店 名古屋市中区栄三丁目 (25) 5 1 7 1  
 駅前支店 名古屋市中村区笹島町一丁目 (54) 1 3 1 7

# 狂言

# 狂言

昭和42年5月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区東門前町5/2  
 井上重兵衛方 電(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

### 狂言人語

「なたね梅雨」あまり耳慣れない言葉でしたが、今年はどこにも聞かれるほど一般化してしまいました。うっとおしい雨が降り続いたあとだけに、雨上りの空の青さ、新緑の木々の梢の光は目にしみる様です。

さて五月は例年ゴールデンウィークを中心に演能の最も盛んな月、特に五月三日には人間国宝、和泉流狂言会の重鎮、野村万蔵氏一家を名古屋に迎えて野村又三郎氏の「やるまい会」が開催されます。万蔵氏は故万斎氏の薫陶をうけ、狂言のみならず面打ちとしても独自の風格をもって精進せられていくことは御承知の通りです。その風格から滲み出る枯淡な芸風はまさに人間国宝としてふざわしいものと云えましよう。殊に万蔵氏の「川上」は定評ある逸品と思えます。是非皆様に御鑑賞下さる様おすすし上げます。

池田広司氏の力作「古狂言台本の書誌的研究」が風間書房から刊行されました。氏の多年の研究の成果であると共に、新しい研究への出発点とも云える画期的なものと云えましよう。先ずは御紹介まで。

### 五月の催能

五月三日 やるまい会	五月五日 巽 会	五月七日 清韻会	五月十三日 猶風会	五月十四日 霞 会	五月二十一日 一謡会	五月二十八日 蘆泉会	五月二十九日 泉 嘉夫	五月二十九日 野村又三郎
佐渡狐 野村万之丞	胡 蝶 足立 尚子	萬 泉 嘉夫	山 姥 大槻 秀夫	夜討曾我 河村 鉦二	大藤内 佐藤卯三郎	隅田川 泉 嘉夫	野村又三郎	野村又三郎
野村 悟郎	野村 高安	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	佐藤 秀雄	高安 滋郎	井上松次郎	井上松次郎
野村 万作	野村 和子	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	佐藤 秀雄	高安 滋郎	井上松次郎	井上松次郎
野村 悟郎	野村 和子	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	佐藤 秀雄	高安 滋郎	井上松次郎	井上松次郎
野村 悟郎	野村 和子	井上松次郎	井上松次郎	井上松次郎	佐藤 秀雄	高安 滋郎	井上松次郎	井上松次郎

### 狂言解説

二九八八西の宮の恵比須三郎殿に申し妻をした男、靈驗あらたな御告げで妻を見付けるのですが、住居をたずねると和歌で応え、また番地を問うと「にく」と一声、去ってしまいます。この謎めいたことばを解明し、やっとな迎えて対面して見ると……。

寝音曲は冠者が謡いの上手なのを聞きつけた主、謡って見よと云いつけます。所が冠者は度々謡わされては迷惑と酒がなしでは、又女共の膝枕でなくてはと注文をつけるのですが、主は酒ものませ、果ては膝枕までさせるので冠者も到々謡わされる羽目になってしまいます。

大藤内能「夜討曾我」で行われる替の間狂言です。曾我兄弟の討入りの夜居合わせた憶病者の大藤内なる男、あわてふためき、その場にあったものを身にまとってともかく命からがら逃げて来ました。それを見付けた男、何とも珍妙なその格好を見て、再びからかいの気を起こします……。

### 狂言同異

野村 広 二

四月は雨の日が実に多かった。十六日、雨がしきりに降る、うそきむいなかを観世会へ行く。いわゆる「なたねつゆ」。雨にけむる苑内の高い木々の梢が青葉・若葉で季節の変化を告げる。文化殿東の大いちょうの緑の点々が目にしみる。かわりに、どこかで椿の花が、雨滴の重さにたえかねて、ポタリと落ちていくにちがいない。そのときみた「恋重荷」(鏡之丞)は、三月末の中目五流能の同「楊貴妃」と

ともに感銘が深かった。恋重荷は、五流能でみた綾鼓(英雄)が執念をのこしておわるにくらべ、救いの世界になっっているのに不満めくことばをきく。しかし、この日鏡之丞をみて、これでよいのだとおもった。日本人の心——心——古風な人情がそうさせたのである。楊貴妃も、三月(先代金剛殿追善能)の豊嶋弥左エ門のとみくらべ、あれは、玄宗慕情を眼前に吐露し、鏡之丞は、おそれかしくんで、ただ在りし昔のなつかしさを物語るといった演能ぶり。しかもどちらも格調はすこぶる高い。四月に入って、五日の伊勢神宮春季神楽祭参加の金春能には、用事で行けず、金春の諸氏にはあえなかつたが、翌六日の東本願寺能には、間にあわせて、いくことができた。

彰如上人(故大谷句仙師)二十五回忌法要能。同上人が金剛家におくった。「鳳凰」染筆の長絹を、金剛永誦君がつけて「羽衣」をたむける。目測で、白書院の見所と舞台・橋掛とは、五〇米から七〇米はへだつたろう。もみぢの青がこの景観に興を添える。能は今一番「舟弁慶・白波の伝」(鏡之丞)。橋掛の効果がいまさらしい。沼津雨氏にお目にかかる。狂言は「猿座頭」(茂山千作ほか)。これと、「猿座頭」(五流能、千作・千之丞・忠三郎)が印象にのこる。放送は、「海外演能団の英国上演」(海外だより、四・一四)。「日本音楽道しるべ」序論、総合芸術としての日本音楽(四・九と一六、続く、いづれもNHK)。本は、「大蔵だより」(三十一号、海外演能団紀行第一信、大蔵弥太郎)「観阿弥的なもの」(欣、芸能三月)「平家物語をめぐって」(谷宏、国語と国文学三月)、「古狂言台本の発達に關しての書誌的研究」(池田

廣司、風間書房、昭和四十一年度文部省研究成果刊行費補助金下付、未見) なお三月にさかのぼって、日本医学会総会の名古屋開催記念に、徳川美術館展示で、「病(やまいの)草紙」(国宝)にあわせて二つの風俗屏風に、「四人の翁舞」と「翁がえりと三番叟の舞」の図をみる。五月のやるまい会に期待しよう。

かたがり

西村 弘 敬

謡本を開けば節付のある句と無い句とある事は誰でも知って居る事であるが、此節付の無い句は通常言葉(ことば)と呼ばれて殆どの人は至極やさしいものの様に思つて言葉の部分には大して関心をよせて居ないのであるが、言葉は本来中々にむつかしいもので殊に趣き(表情)をあらわす大切なものである筈である。之には「語り」(かたり)、「詞」(ことば)、「せりふ」と三通りになる、此語りというは事の子細、謂れ(いわれ)、状況の説明など物語りで聞かせるもので仕手脇狂言何れにもある、先づ仕手方では例えば朝長の謡で脇が朝長の最期の有様を尋ねるのに対し仕手は「其時の有様申すにつけて」と語り出す、謡本にも上に語の字が書かれて居る又大原御幸の謡にも先帝の御最期の有様を仕手が謡ふのに語の字が書かれてある、又脇の語りは沢山あって鉢本、藤戸、道成寺、角田川、接待、などあるが此外に謡本に無い特種の語りがある、之れは

小書なつて謡るもので芭蕉、松垣、敦盛、舟弁慶、源氏供養、朝長などがある次に間狂言(あい狂言)の間語り(あいがたり)がある、之れは能の中入に仕手の装束の着替への為め空白が生ずるのを埋めるのに其能の詳細を説明するもので、之を聞く事によつて謡本だけでは充分に理解出来ない事がよく知れて誠に結構なものである。次に「詞」とは呼かけるとか尋ねるとか答えるとか或は独り言で述べるとか色々の場合の言葉であり、又「せりふ」というのは仕手と間狂言、脇と狂言との色々のやりとり問答する言葉を云うので、之れ等は殆ど謡本には書かれて居らぬのが普通である、而して前掲の「語り」「詞」「せりふ」は本来夫々に趣きのある語り方があって、語りは語ると言い、詞は謡うと言い、せりふは言うとか称へるのが本道で夫々に謡い分けなければならないのである。

協会名古屋支部よりのお知らせ

- 支部役員任期満了に付三月二十五日  
総会の節改選の結果左記の通り決定
- 支部長 田鍋惣太郎
  - 副支部長 高安 滋郎
  - 常議員 田鍋惣一郎 前田 昌広
  - 内藤 泰二 六車 真三
  - 真柄 米次 鬼頭 八郎
  - 井上松次郎 鬼頭 五郎
  - 増田 一雄 大塚 一二
  - 林 甲子夫 二井 英逸
  - 佐藤卯三郎
  - 藤田六郎兵衛
  - 相談役 西村 弘敬
  - 尚後藤孝一郎に書記を委嘱

六月の催し

六月三日	梅若会 素謡会	
六月四日	能楽俱樂部 雛子会	
六月五日	熱田祭奉納能	
第一部	午前十一時始	
鉢木	柴田初太郎 高安 滋郎	
野村又三郎	大野 弘之	
井上松次郎	佐藤 秀雄	
井上礼之助		
第二部	午後二時始	
加茂	村瀬 澄子 西村 欽也	
衣斐 正宜		
佐藤卯三郎		
井上礼之助		
六月十日	和調会	
六月十一日	青陽会	
六月十一日	吉野天人 加賀	
鶴亀	柴田初太郎	
千手	大野 弘之	
占	河村 鉦二	
歌	井上 祐一	
歌	佐藤 友彦	
六月十八日	観世会	
清経	観世 元昭	
小塩	大槻 秀夫	
小鍛冶	井上松次郎	
梅若万三郎	佐藤 秀雄	
石	茂山千五郎	
茂山千之丞	茂山 正義	
六月二十五日	宝生会	
杜若	辰巳 孝	
鞍馬天狗	宝生 英雄	
井上	祐一	
井上松次郎	佐藤 友彦	
佐藤卯三郎	井上松次郎	
佐藤 秀雄		

名古屋観世会員  
六車真三師四月二十八日急逝謹しんで哀悼の意を表します。

京風料理 美晴

千種区内山町 (ふみたかビル)  
TEL (44) 0064  
佐藤琴子

# 狂言

## 狂言人語

降り続いた雨がやっと上ったと思うと、今度は暑い日照り続き。またぞろ雨が恋しくなつて参りました。でもやがて梅雨、そして本格的な夏も真近なことです。

さて今月も数多くの演能が企画されており。そして七月の八日には朝日狂言会、皆様も是非御期待下さい。所で近頃の話は「能楽会」の今度の増員で、名古屋から新たに五名が扱ばれたことでしょう。中京能会の発展を皆様と共に喜びたいものです。

## 六月の催能

六月三日 梅岩会 素謡会  
六月四日 能楽俱樂部 囃子会  
六月五日 熱田祭奉納能

第一部 午前十一時始  
能 鉢 木 柴田初太郎 高安 滋郎  
間 野村又三郎 大野 弘之  
狂 附 子 井上松次郎 佐藤 秀雄  
井上礼之助  
第二部 午後二時始  
能 加 茂 村順 澄子 西村 欽也  
衣斐 正宜

昭和42年6月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町5ノ2  
井上重兵衛方 電(321) 1430  
名古屋狂言共同社  
印刷所  
有限会社 安井印刷所 電(541) 4681

狂 芥 川 井上礼之助 佐藤 秀雄	能 舟 弁 慶	六月十日 和調会	能 吉野 天人 加賀 敏彦 西村 欽也	能 鶴 亀 柴田初太郎 西村 弘敬	能 千 手 佐藤 太俊 高安 滋郎	能 歌 占 河村 鉦二	能 歌 争 井上松次郎 佐藤 友彦	六月十八日 観世会	能 清 経 観世 元昭 西村 欽也	能 小 塩 大槻 秀夫 西村 弘敬	能 小 鍛 治 梅若万三郎 高安 滋郎	狂 磁 石 茂山千之丞 茂山 正義	六月二十五日 宝生会	能 杜 若 辰巳 孝 高安 滋郎	能 鞍馬 天狗 宝生 英雄 西村 弘敬	狂 井 礪 井上祐一 佐藤 友彦 井上松次郎 佐藤 秀雄	佐藤 卯三郎
-------------------	---------	----------	---------------------	-------------------	-------------------	-------------	-------------------	-----------	-------------------	-------------------	---------------------	-------------------	------------	------------------	---------------------	------------------------------	--------

## 狂言解説

不須川留守中に秘蔵の砂糖を食べられまいと、ぶすぐという大毒だからと偽って出かけた。所が悪戯者の冠者二人、怖いもの見たさに開けて見て、とうとう二人でからにしてしま

いました。さあ、この云い訳には……。

### 第九回

### 朝日狂言会

昭和四十二年七月八日 午後五時始  
熱田 神宮 能 楽 殿  
主催 朝日新聞社  
狂言共同社

### 孫 聶

### お茶の水

### 素囃子

### 早 舞

### 朝比奈

### 狂言小舞

### 網

### 煎

### 物

### 閉会

た男は逃げるついでに鳥目をかすめて逃げるのですが、人買いも太刀を持って追いかけてます。追いつかれ、振り上げられた太刀を見て、男はとっさの機転に「呑まう」とやり返します。

井礪川勾頭と菊市の座頭二人、川を渡るとして石を投げ、渡り瀬を知らぬのですが、その石が水面で「どぶん」として底に当たって「かちり」と、即ちこの曲名の「どぶかちり」です。それを見つけた目明きが二人を散々にかちりつけて最後に追込まれます。

大 破 鬼頭 喜太郎  
大 破 河村 総一郎  
小 破 藤田 徳太郎  
小 破 藤田 六郎兵衛

大 破 鬼頭 喜太郎  
大 破 河村 総一郎  
小 破 藤田 徳太郎  
小 破 藤田 六郎兵衛

井上松次郎 友彦  
井上 祐一  
大野 弘之

朝日新聞社  
狂言共同社

野村又三郎 丘造  
河村 三造

野村又三郎 千作  
何 主 茂山 正義  
立 立 野村又三郎  
立 立 大野 弘之  
立 立 佐藤 友彦  
立 立 井上礼之助  
立 立 井上松次郎

保之 右近  
井上松次郎 井上 祐一

五月下旬に入つて、わが庭の泰山木が白い花をポツカリとひらいてみせた。その頃、ものす

ごい風邪でねていた。熱の少しさがったときで、網戸ごしに、青葉にまじって目にする花から、青空の風について、あの香りがかすかにたただよってくるのが、熱っぽい身体に心よい。高熱で夢ばかりみていた。それが、中学で

は……。

磯石川遠江の国から奉公に上ろうとした男、都近くで人買いにだまされ売とばされそうになりました。それを

は……。

肺炎とチブスとに、二年つづけて、かかったときもそうであったけれど、年をとると、若年とはちがいで、みる夢も、さっぱりとし、何か乾いていて、ねばり気がないようであった。この間、なくなった古靱大夫や、嵯峨野の竹やぶなどが出てきたようだ。そんなとき、ポツカリ目をさました朝のすがすがしいなかにあの白い花をみつけたのである。下旬には青桐の白い花もみたが、その月のはじめに紫の桐の花も目にした。この木はほとんど毎日眺める大木で、実に入りっぱなすがたである。その姿を、冬から春、春から秋にかけて、変化のうちにみていることは、人の一生を暗示しているようでもあり、この桐の木も、あの夢のみかたも、やはり観能や演能の道で壮靑老の三期のちがいをあらわしているようにもおもわれてならなかった。野外の能には最適の季節を迎えたが、今年も、春日興福寺の薪能は無事すんだよう、その様子はテレビでみた。

今は五月だが、それは近年になってからのこと、前は三月で、東大寺の修二会とこの薪能の二本立が春の先触れであったようだ。薪に火が入る頃、次第に足のつま先から冷えてきて、はく息が白い年もあった。

十二月の「おんまつり」は夜中に宿舎の門をたたくが、薪能は電車で大阪に帰れた。白米のご飯をみそ汁とお新香で、話に打ち興じながら幕内であたたかのもなつかしかった。雨のとき、東金堂の軒先で、「巴」(辰巳孝)を傘さして見たのも楽しい思い出。もう何年も行っていないこの頃である。五月二十日、久方ぶりに街に出て、近代日本の美人展(日経、松坂屋)をのぞく。

昔みた名画に再会。なつかしい。清楚で、うえん、優雅でモダン。それでいて、想像以上におちついたふんい気をももした。あの美しさ、美しさのうちに、一本筋の通った心の流れをつかみとることができた。これを、舞楽・能・狂言・人形・カブキ(江戸邦楽)に登場する女性を並べたらと、ふと雲のような小さな思想が頭をかすめて、あの風邪のためそれなりに霧消してしまつた。

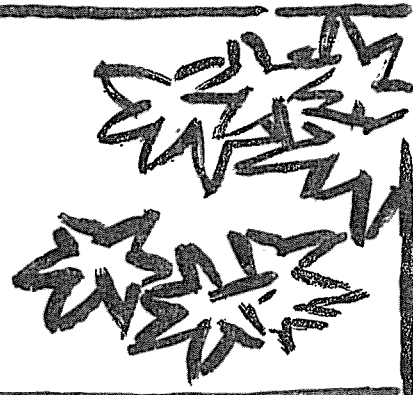
次は、人間国宝になられた野村万蔵氏にお祝いのことばをおくりにしたい。万蔵と千作。豪放さが柔らかく、また平常の動作とかわらない演じ方にかわって、心のおもむくところこれ狂言芸と申し上げたい。ならばかいたのは別にくらべるといふつもりでなく、東西の狂言界で大切な二人。その一人である千作氏も「猿座頭」(中日五流能)でみたように、近年は、くず湯のようにさっぱりして柔らかな味がみせてもらえることがよくなる。せつかく健康に留意されますよう願ひしたい。さて、中日五流能の本質については別記するとして、今度は話かわって今年の海外能のことである。さき頃、大好評のうちに帰国。団長の橋岡久馬氏と同行の大蔵弥太郎氏には、成果をあげられた一因は、演者のきびしい心がまえと行住坐臥の正しさが、知らず知らず、外国人の広い胸にしみわたつたからでしょうと、別々に語り合う機会をもつた。イギリスのシェイクスピア劇の本拠での演能は、一昨年のギリシャの公演とともに記念すべきことです。芸能研究(十七号)、能楽タイム

ズ(五月)、大蔵だより、雲(十三号)、名古屋タイムズ(五・八)、北国新聞(五月中旬)、朝日(夕刊、日付未詳)などで、その模様をよんだ。来年もある由。名古屋からも参加してほしいものです。なお、いつかこの欄で紹介した故フェノロサ氏の能につくした功績をしのんで、フェノロサのほうむらわれている三井寺で、記念の行事があったこと四月三十日(芸能史研究)。大変結構なことです。五月までにみた能はみたかった能の約半分で八番。楊貴妃・恋重荷(鏡)、花筐(元正)、求塚(武田太加志)、石橋(喜之・武雄)、屋島(喜之)、綾鼓(英雄)、田村(巖)。

狂言はやるまい会(野村又三郎)。この上半期も、共同社はなかなかの活躍。名古屋勢では「翁」が内藤泰二と久田秀雄の二氏で演ぜられた。放送では、「毛越寺の延年」(カラー)、「文化講演会、近代文学館と国文学」(久松潜一、ラジオ)、「頼政」(元昭、いづれもNHK)。本は「ミチオ・イトウ—鷹の井戸ほか」(尾島庄太郎、英語青年六月)、「私と古典—世阿弥」(杉本苑子、東京新聞、五月中旬)、「シェイクスピアを訳しおわって」(福田恒存、朝日五、四)。催し物は、藤田美術館展示(朝日、丸栄)で、一休真蹟の横で「聖人無夢」(欠伸子)をさがし、春陽会で「静物」(加賀孝一郎)が卓上ランプにカヅラ扇のたてかけてある構図をみつけた。山路躍生作舞リサイタルで長唄古曲「釣狐春乱菊—釣狐」をみたことをつけ加えたい。

また朝日狂言会の七月がやってくる。

司子茶房  
茶房茶房



中区丸の内一丁目五ノ二三  
(23) 五七六九

### 天正狂言本拾い書き

座頭狂言について

佐藤友彦

「座頭物」と呼ばれる一連の狂言がある。これは登場人物が座頭という片輪者であつて、現行曲には「川上」「伯陽」「どぶかつちり」「清水座頭」「鞠座頭」「猿座頭」(大蔵流のみ)等があり、他にも「不見不聞」などもこの内に入れ得る。この座頭狂言の持つ笑いに、全く二つの異質な世界がある。一つは人間性の豊かな情感を多分に衰感をまじえて見事に捉えたもの、即ち「川上」「清水座頭」など、そして今一つは盲人であるが故にまき起る不自由さを笑いの粗材として取り上げたもの、そしてそれは特に天正本までさかのぼるとこの座頭狂言の特色はいよゝ顯著な様相を帯びて来るのである。

今、こゝで「天正本」中にある「馬借座頭」を紹介しよう。

ざと一入出て、はくゆうと名のつてこきふ(児校か?)を呼び出す。みうおつかう(妙音講)に行べき、だんなへ行て馬かりよとゆふ。さて段(檀那)にかりる。かす。又こつたふ(句頭)出て、段なへ馬かりにやる。これにもかす。さてはくゆう馬つれに行。又こつたふも馬つれに行。いさかひする。段な出て歌よます。道なにはかけこぼりをころばして、はくゆうふなくば谷へほうらん。酒もりのお座しきふさへ入ざれば、かすこつたふはむやくなりけりこつたふはら立て、いさかひする。段な出てつらをはる。後くみ合て、こつたふふまるる。段もふまるる。とめ。

云うまゝなく、現行狂言「伯陽」の原型であるが(「伯陽」では琵琶を借りに行く)、こゝで注目すべき点は二人の盲人がいさかひを始めてから、檀那が出て来て二人の面を張る、という演出である。現行狂言では尤論これが行われず、檀那は二人の間に仲裁に入り、勝負の行司をして、盲人二人に投げられる、いわば人の好い被害者として処理されてしまっている。この演出における変移は舞台が粗雑になるのを避けて、二人の盲人の動きに焦点をしぼつたものであり、それはシテ、アド、小アドのそれ、の役割、性格を明確にして行つた動きと同一のものである。しかしながら今日でも例え「どぶかつちり」などには、盲人二人の対立をおおりにたてる様から目明きが、二人をかかわる「打擲する」という演出は残っている。ともあれ、対立関係が表面では盲人同志の様に見えながら陰にはちゃんと目明きが居り、二人をからかい、おもしろがってその対立をおおりに立てる。そして盲人同志が組み合った後、ふと本当の自

分達の対立相手に気が付いて二人で追いつ込む、という形になって、舞台は終えるのである。もう少し「天正本」をながめて見よう。本文記載百余番中に「駄賃座頭」「鞠座頭」「布買座頭」「たらし座頭」「ごせ座頭」「犬引座頭」そしてこの「馬借座頭」の七番であり、それは現行曲中で座頭物の占める割合より多いと云えよう。また本文の記載はないが目録には、「猿座頭」の名も見えている。現行曲にあるのが「鞠座頭」「ごせ座頭」「清水座頭」それに「馬借座頭」であり、あとは現存しない。その現存しない曲がいつれも盲人対目明きの葛藤を扱ったものである。

### 納涼能ノ夕

八月五日

於 若宮八幡社 五時始

能 小袖曾我 衣斐 正宣

能 胡蝶 柴田 収武 西村 欽也

狂 雷 井上礼之助 野村又三郎

能 土蜘蛛 豊島三千春 高安 滋郎

能 井上 祐一 井上 義次

他三舞囃子 仕舞

### 大衆能

九月三日

於 愛知文化講堂

能 俊寛 内藤 泰二 高安 滋郎

能 杜若 梅田 邦久 西村 欽也

狂 三人片輪 和泉 保之 井上礼之助

能 小鍛治 金春 松三 高安 滋郎

能 本田 光洋 佐藤 秀雄

る。そばから目明きに面を張られる。布買座頭——一本巻きの布を、二人の座頭がそれ、片端ずつ売りつけられ、互いに引つ張り合つていさかひを始める。けんだん(今の目代)が出て裁こうとするが裁き切れず、句頭をふみころばす。

にくらし座頭——宿を借りようとした座頭が女にだまされ、川を渡るとてずぶぬれになり、ぬいだ着物まで取られて追いつむ。

犬引座頭——現行「猿座頭」と同趣向だが「猿座頭」の名は他に見えるので別の曲。鷹狩りに出かけた殿が座頭の妻を誘い、妻の誓りに犬をつないでおく。座頭は犬に追い廻されて逃げ込む。

こうして見ていると現行「伯陽」の様に目明きが被害者となるのはむしろ例外であつて目明きは本来加害者であると云うことである。

本来狂言における対立関係は、主従関係に典型的に見られる様に、従的立場にあるものが常にだし抜き、相手をやりにこめる。そうでなくとも無理難題を押し通そうとする側に結局敗北が認められる。そしてそれは盲人同志の世界に於ても、検校や句頭と座頭、こきふ(児校か?)下々座頭、或いは稚児座頭(であろう)の対立は大体的場合座頭やこきふの側に勝利があつて追込みとなり、一般の主従関係を取扱つたものと同じ性格をもっている。それは単なる「諷刺」という面からも十分考えられる事ではあるが、それならば目明きと盲人とを対立させた場合、目明きの方が盲人にだまされる、と云つた筋立てが出て来てよきさうなものであるが、これが見当らないのである。そこに狂言世界の持つ特殊性があると云えよう。

今一つ、現行大蔵流にある「月見座頭」を見よう。八月十五夜の名月の夜に座頭が月を見えずとも虫の音なりとも聞こうと野に出る。とそこへ通りか

「つた一人の男、座頭の風流心に動かされ、持参の酒を振舞って酒盛になるが、やがて別れて帰りにふと悪戯心を起し引返して座頭に突当り、散々に打擲して入る。起きた座頭は「世には様々な人が居るものじゃ」とつぶやき入る、というものである。この一見矛盾した様にも見える男の行動こそが当時の人々の片端者に対する一般的な見方であったと考えられる。即ち、一方では前半の舞台に見られる座頭に対する人間としての普遍的な共感「川上」「清水座頭」と云う名作を生み出し、又一方後半の座頭を笑いものとしてなぶるのも、当時の世相の反映として数多くの座頭狂言を残し、主流とも云うべき流れを形成している。

即ち、かつて本紙第八十八号で述べた様に、狂言を生み支え、育てつゝあつた民衆は広汎な社会の底辺にうごめく人々に連帯感を持ちつゝも、同時に乱世の中で学び取って来た自己の生活哲学「弱肉強食」という論理が彼等のうちにしっかりと貫かれていたのである。支配被支配の関係においては、この二つの流れは何の矛盾することなく統合され舞台に生き／＼とした彼等の姿を再現している。所が、盲人対目明きとなると、その流れは相反するものとして真二つに分かれてしまうのである。そこに座頭狂言の持つ宿命的な、哀しきがあると云えるのではなからうか。

七、八、九月の予告

- 七月 二日 調友会
  - 能海 人 辰巳 孝 西村 欽也
  - 間 佐藤 友彦
- 能鶴 飼 高橋 静夫 高安 滋郎
- 間 佐藤卯三郎
- 狂石 神 井上礼之助 佐藤 秀雄 井上松次郎
- 七月 八日 朝日狂言会
- 七月 九日 螢雪会
- 七月十六日 淡交会 ゆかた会
- 七月二十三日 能楽協会名古屋支部 半歌仙会
- 八月 五日 納涼能 於若宮八幡社
- 九月 三日 大衆能 於愛知文化講堂
- 九月 十日 邦謡会
- 九月十五日 日本能楽会主催能 於熱田能楽殿
- 能松 風 宝生 英雄 岡治郎工門
- 間 佐藤卯三郎
- 能安達原 観世 元正 高安 滋郎
- 間 井上礼之助
- 狂貫 舞 野村又三郎 井上松次郎 佐藤 秀雄
- 他三舞囃子仕舞
- 九月十七日 観世会 素謡会
- 九月廿四日 婦人師範連合会

協会よりのお報せ

- 平河和子氏 能玉葛披 辰巳社中
- 玉井弘子氏 能羽衣披 辰巳社中
- 足立尚子氏 能胡蝶披 辰巳社中
- 松尾年子氏 能玉葛披 辰巳社中

舞見中

- 一 河村 鉦 二 会
- 邦 謡 梅田 邦 久 会
- 藤 門 加藤 良 久 会
- 長 生 鬼頭 八 郎 会
- 中 部 金 春 前田 昌 広 会
- 竜 吟 藤田 六郎 兵衛 会
- 観 衛 田 鶴 惣 太 郎 会
- 霞 水 林 甲 子 夫 会
- 潤 水 野崎 太 郎 会
- 観 水 久田 秀 雄 会
- 観 正 高安 滋 郎 会
- 高 安 高安 滋 郎 会
- た なび き 田鍋 惣 一 郎 会
- 隼 雲 内藤 泰 二 会
- 調 友 会
- 名 古屋 能楽鑑賞会 田 惣 太郎

- 名古屋能楽俱樂部 植村 真太郎
- 風 韻 殿島 修 二 会
- 幸 友 福井 啓次郎 会
- 金剛流松風社 片野 東四郎
- 掬 水 柴田 初太郎 会
- 曲 水 増田 一 雄 会
- 春 鶯 山田 仁三郎 会
- 正 楽 加藤 丈太郎 会
- 松 謡 佐藤 太 俊 会
- 清 風 大塚 一 二 社
- 青 陽 会
- 能楽協会 名古屋支部 支部長 田鍋惣太郎
- 名古屋和泉会
- 狂言共同社 (イロハ順)



# 狂言

昭和四十二年九月一日発行  
 発行所  
 名古屋市中区東門前町5ノ2  
 井上重兵衛方 電(321) 1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 友井印刷所 電(541) 4881

## 狂言人語

残暑厳しい内にも、何となく秋の涼味を感じられる此頃です。さてこの九月で、小紙「狂言」も百号を数えました。幾度も投げ出されそうなやつかいものにされ、また毎号巻頭言、随筆等執筆された歌村彦四郎師の死亡、そして編集も代を変え、年月の流れの中にかすかな足跡をとどめつゝ十年余、今皆様の御手元に百号を送りとゞけることが出来ました。これと皆様のあたたかい御尽力のたまものと感謝申上げる次第です。今後ともより一層努力致す所存です。どうかよろしくお願ひ致します。

## 九月の催能

九月三日 大衆能 午后二時文化講堂  
 能 俊 寛 内藤 泰二 高安 滋郎  
 能 杜 若 梅田 邦久 西村 欽也  
 狂 小鍛治 金春 欣三 高安 滋郎  
 間 本田 光洋 佐藤 秀雄  
 狂 三人片輪 和泉 保之 井上松次郎  
 野村又三郎 井上礼之助  
 九月十日 邦謡会  
 九月十五日 日本能楽会主催能  
 能 松 風 宍生 英雄 岡治郎エ門  
 能 安達原 観世 元正 高安 滋郎  
 間 佐藤 秀雄

狂 子盗人 三宅藤九郎 和泉 保之  
 狂 文山賊 野村又三郎 井上松次郎  
 九月十七日 観世会 素謡会  
 九月廿四日 婦人師範連合会

## 狂言解説

三人片輪片輪者を召抱えんとの高札を見て現れた三人、各々盲目、いざりおしに化けてまんまと抱えられ、主人の留守に大騒ぎを始めます。楽しい酒宴と小舞、小謡に狂言の味を充分お楽しみ下さい。  
 子盗人 盗みに入つた男、盛敷に寝かせてあつた赤児にいつたんは肝をつぶしますが、よく見るとその可愛さ、自分の立場を忘れてあやし始めます。藤九郎氏の名人芸、その変化を御鑑賞下さい。  
 文山賊 仕合せを仕損じた二人の山賊口論の末、決斗をすることになりました。その勇しい決斗を誰にも知られず死ぬのは口惜しいと、仔細を書き置いた死ねことになりませう。さあ書き置きの名文句に……。

## 狂言同異

野村 広 二一  
 八月下旬、テレビ塔両側の街路樹は枝刈りがはじまる。すき間のできた梢をわたる風はもう秋の気配をもたらす。また、その頃、こおろぎやかかねたたき

さて、九月はこの「狂言」が第百号 しく、まるで幾代かつづく仕出屋の幕を迎える月である。狂言共同社に心かゝの内弁当のように何気なく巧みに編集らおめでとうを申し上げたい。その間 されてきた。そしていろいろ曲折はあつても、「狂言」は何事もなかつたように、百号まで育つてつりつばに成人した。月々おとなしい小さな花をこの名古屋で開いてきた。東西に配つておられるなかでも、昨年早稲田演劇博物館から第一号より通して申し受けたいたの希望があつた。また記録についても、名古屋の能界とともに歩んできたこの十二年の「狂言」には共同社で最長老の井上新三郎、歌村彦四郎両氏が他界、そのあと河村、佐藤と河村の両長老をはじめとし、このたび無形文化財保持者の指定をうけた井上松次郎を軸に、

昭和四十二年十月十五日(日) 午前十時半始  
 山本博之来名三十年記念  
 別会能番組  
 素謡 神 山本 真義  
 後 観世 武雄  
 観世 元正  
 素 茂 高安 滋郎 河村龍一郎 観世 元信  
 磯 松 蟬 竜 丸 田 殿 丹 塚 秀 三  
 春日 竜 虫 丸 田 殿 丹 塚 秀 三  
 春日 竜 虫 丸 田 殿 丹 塚 秀 三

三 輪 山本 博之  
 高安 滋郎 山本 孝 野口伝之輔  
 白式神楽 弱法師 柴田初太郎 大槻 秀夫  
 江 八木 山本 孝 野口伝之輔  
 春 八木 山本 孝 野口伝之輔

正 尊 西村 欽也 山本 孝 鬼頭八郎兵衛  
 起請文 山本 孝 鬼頭八郎兵衛  
 立 千崎 和重 山本 孝 鬼頭八郎兵衛  
 附 祝 千崎 和重 山本 孝 鬼頭八郎兵衛

名古屋観劇会事務所  
 名古屋市中区青柳町五ノ一五  
 電話七四一四六七五番  
 加藤総兵衛 後援 朝日新聞社  
 指定席 二〇〇〇円  
 自由席 一五〇〇円

次郎を軸に、

中堅佐藤秀雄、井上礼之助、井上祐一、今年三番叟を初演した佐藤友彦青年の新進と並び、やはり本年無形文化財保持者の指定を受けた野村又三郎を加えて、名古屋和泉流の充実が年々しづがではあるが徐々に深まってきた音がはつきり聞えてきます。なかにはたくしが故歌村氏のすいばんにより、筆者の末席に加えられるものの、三十一号から毎号よくまあ同じようなことを書いてきたものと、その厚かましきは幾重にもお詫びしたいとおもいます。今は末長くつづくことを祈るばかりです。

五日は第二回新能市民納涼夜能が若宮さんで興行。今年はまだ幕を周閉にめぐらす。「雷」(礼・又)には抱腹絶倒。「土蜘蛛」(豊嶋三千春)は佳品。風の相当あつた夜だが、その風にひるがえる長綱の下から(厚板)唐織の紅色が隠見する「胡蝶」(柴田収武)と菓をなげかけする「千筋の伝」の「土蜘蛛」はまさに大人、こどものみる夜能にふさわしく、むつかしい幽玄味をやさしくみせてくれたものだ。切放送と本其他の事は次号にゆづりたい。

らいはい

西村弘 敬

らいはい(礼拝)といふ言葉は概ね神仏を敬い拝む場合に使はれて居て、人間同志での敬いとが礼儀などに敬礼といふ言葉が用いられ、之れ等の仕方(しかた)にも色々な形式がある。先づ人間と人間との間の礼には敬礼と最敬礼とがある、普通の敬礼は上体を少しく前の方へ屈して軽く頭を下げる仕方で我々が日常に行つて居る仕方であるが、最敬礼となると上体を相当に深く屈して深く敬意を表する仕方であつて、至極丁寧に敬礼である。昔の軍隊では敬礼は最もやかましく其仕方も室内室外と夫々細かく規定せられて居て、間違へたり欠礼などすると

時には厳しく罰せられる事もあつた。礼拝といへば大体神仏と対するもので之れは対照とする目標によつて色々違いがある。即ち宗教によつて其方式慣習などは異なるものであるが、大別すれば敬礼式と合掌式とになる様に思はれる、勿論近來色々の新興宗教が出現して来て其礼拝の方式なども色々になるから一概には言はれないのである我が国本来の神道では神主が拍手(かしわで)を二つ打ち両手に物を捧げて深く頭を下げて二度礼拝する、即ち再拝の方式をするのであるが、我が能楽の舞台の上では此方式が用いられて居らず大体合掌の方式が用いられて居る様に思ふ、狂言の方の礼拝は一寸変つた様式で、先づ下に座して扇を広げて膝の前に置き次に両手の掌を広げ頭より高い処で両手の指先を合はせて高い処より下の方へ振り下げる様な仕方で扇の上迄両手を下げ頭も下げて深く礼をする之れが狂言独自の仕方である。次に能の方では仕手方でも脇方でも両手の掌を開き指先を合はせて合掌の形ちをするのであるが、仏教の合掌の様には必ず指先を合はせるのみである。然しながら此合掌の仕方は流儀の作法にて色々あつて、割合に高い処即ち口の高さの処にて合掌するものもあれば又胸の辺や腹の前と比較的低い位置にする人もある様で色々あるが、大休能での合掌は神仏を礼拝する場合もあれば脇の傍に回向を頼む様な場合もあり其目的も種々なるのである。能を御覧になる諸君にも此辺の仔細を知悉して居られると幾分の興味もある事と存せられる。

十月の予告

十月一日 風韻会

- 能 清 経 三木美智子 西村 欽也
- 能 舟弁慶 渡辺 節子 高安 滋郎
- 能 井上 祐一

能 井 筒 殿島 修二 西村 弘敬	能 薩摩守 佐藤 友彦 井上松次郎	能 海 士 本田 光洋 高安 滋郎	能 石 橋 井上礼之助 西村 弘敬	能 悪太郎 佐藤卯三郎 井上松次郎	能 松 風 金剛 巖 高安 滋郎	能 黒 塚 豊島 豊 西村 欽也	能 萩 大名 佐藤卯三郎 井上松次郎	能 加 茂 観衡会別会 高安 滋郎	能 三 輪 佐藤 元正 高安 滋郎	能 正 尊 山本 博之 高安 滋郎	能 鳴 子 山本 勝一 西村 欽也	能 舟弁慶 川瀬 都子 井上 祐一	能 舟 葉 練 井上礼之助	能 花 月 金春 信高 福玉茂十郎	能 班 女 梅若 秀雄 高安 滋郎	能 望 月 観世 喜之 福玉茂三郎	能 八句連歌 和泉 保之 井上松次郎	能 安 宅 久田 秀雄	能 半 菰 井上松次郎 佐藤 秀雄	能 安 達 原 加藤丈太郎 井上礼之助	能 安 達 原 上田 照也 佐藤卯三郎	能 蛸 井上 祐一 大野 弘之
-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	------------------	------------------	--------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	-------------------	---------------	-------------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------	-------------------	---------------------	---------------------	-----------------

### 観世流 入門稽古本

半紙判 和装小綴 各五十余丁 各巻 ビニールカバー付 上・中・下各巻 四三〇円 下七五円 全巻一、五一一円 送料共

定予発 〃 〃

上巻 9月20日 中巻 〃 下巻 9月30日

8月末日 8月末日 8月末日

申込締切

**今回御申込の特典**

全三巻を予約お申込の方に、一組毎に最終回の配本の際に、別冊の新編集「観世流・謡の総心得」を贈呈いたします。

**送金方法**

振替 東京二一〇三〇番 住友銀行神田支店 富士銀行九段支店

**収載曲目**

上巻(鶴亀・田村・羽衣・橋弁慶・紅葉行)

中巻(竹生鳥・小袖曾我・吉野夫人・富士太鼓・土蜘蛛)


下巻(菊慈童・経正・東北・百万・狸々)

**この謡本の特徴**

\*曲趣、謡い方、能の鑑賞、役別表の他に、辞解(難句解説)、仕舞の図解をすべて新しく書き下して各曲のはじめに記載。

\*最も正しい謡い方を自然に覚えるよう、節付を整備、新たに編集。

\*上欄には初心者にもすぐ理解されるように、一々の節の扱ひ方を詳細に註記してあります。



## 能楽書林

東京都千代田区神田神保町三ノ六  
電話 二六一〇八一・三〇八四八

# 報

# 言

昭和42年10月1日発行  
 発行所  
 名古屋市中区東門前町5/2  
 井上浪兵衛方 電話(321)1430  
 名古屋狂言共同社  
 印刷所  
 有限会社 安井印刷所 電話(541)4681

## 狂言人語

懸案の百号記念号もどうやら発行、さらに新しい道へと歩を出すことになりました。ともすればマンネリ化しがちな紙面ですが、今号から共同社長老達の昔話、故人のエピソードなどを簡単に一語ずつ紹介して行きたいと思えます。

扱、十月は最も盛んな月、観舞会別会を初め、金春、金剛定式能、名匠能など目白押しに並んで芸術の秋を飾っております。是非お出かけ下さい。

## 十月の催能

十月一日 風韻会  
 清 三木美智子 西村 欽也  
 水野 撫子  
 舟弁慶 渡辺 節子 高安 滋郎  
 井上 祐一  
 能井 筒 殿島 修二 西村 弘敬  
 佐藤 友彦 井上松次郎  
 佐藤 秀雄  
 十月八日 金春会 本田秀男師追善能  
 能海 士 本田 光洋 高安 滋郎  
 井上礼之助  
 能石 橋 金春 信高 西村 弘敬  
 金春 清高 河村 丘造  
 佐藤 卯三郎 井上松次郎  
 佐藤 卯三郎  
 十月十日 金剛会(体育ノ日)  
 能松 風 金剛 巖 高安 滋郎

能黒 塚 井上 祐一  
 佐藤 友彦 西村 欽也  
 狂萩 大名 佐藤卯三郎 井上松次郎  
 井上礼之助  
 十月十五日 観舞会別会  
 能加 茂 観世 元正 高安 滋郎  
 佐藤 秀雄  
 能三 輪 山本 博之 高安 滋郎  
 佐藤卯三郎  
 能正 尊 山本 勝一 西村 欽也  
 佐藤 友彦  
 能鳴 子 井上松次郎 井上 祐一  
 井上礼之助  
 十月廿一日 一語会  
 能舟 弁慶 川瀬 郁子 高安 滋郎  
 井上礼之助  
 狂齊 葉練 野村又三郎 佐藤 秀雄  
 名匠鑑賞能  
 十月廿二日  
 能花 月 金春 信高 福玉茂十郎  
 佐藤 秀雄  
 能班 女 梅若 六郎 高安 滋郎  
 佐藤卯三郎 佐藤 友彦  
 能望 月 観世 喜之 福玉茂十郎  
 保之  
 狂八 句連歌 和泉 保之 井上松次郎  
 青陽会  
 十月廿九日  
 能安 宅 久田 秀雄 高安 滋郎  
 井上松次郎 佐藤 秀雄  
 能半 薔 加藤文太郎 西村 欽也  
 井上礼之助  
 能阿 原 上田 照也 高安 滋郎  
 佐藤卯三郎  
 能蛸 井上 祐一 大野 友彦  
 佐藤 弘之

## 市民芸術祭参加

昭和四十二年十一月十一日  
 (土) 午後五時

## 第七回 和泉会

墨 塗 大名 佐藤卯三郎 女 井上 祐一  
 佐藤 友彦

佐渡狐 佐藤卯三郎 野村又三郎 秀雄 井上松次郎

宗 論 野村 万藏 河村 丘造  
 和泉 保之 藤田六郎兵衛

弓矢太郎 大野井上松次郎 立上 大野 弘之  
 井上礼之助 立上 佐藤 秀雄  
 井上 祐一 佐藤 友彦  
 井上松次郎 井上 義次

主催 狂言 共同社  
 後援 名古屋市教育局委員会

## 狂言解説

薩摩守平家の侍—薩摩守—忠則といふ秀句を教わった住吉参りの新発智、無賃乗船を試みたのですが……。悪太郎は乱暴者の悪太郎、今日も路次で酔いつぶれているを、伯父は悪太郎の姿形を変え今日よりは、南無阿弥陀仏と改名せよと云い残しました。夢現で聞いた悪太郎、目覚めると付いたばかりの新しい名を呼びながらやつて来る者が居ります。萩大名清水へ遊びに出掛けた田舎者の大名と才覚者の冠者、茶屋の庭先の萩によそえて大名は冠者に教えられた

歌を詠もうとするのですが……。

鳴子鳥追に出かけた二人の冠者、主よりの見舞酒によい気嫌で小謡節で鳴子をひきます。狂言小謡の味わいを十分に堪能させてくれるでしょう。

膏葉練、互いの名声を聞きしり、腕比べんとて街道で行逢います。さあこの勝負は……八句連歌を借金の申訳に出掛けた男、庭先の花について好きな連歌の一句つりこまれた相手もそれにつけ、八句連歌を重ねて借金の方は……。

蛸の精と協働、そして在所の者という能形式の仕舞狂言です。蛸の精という所にかにも狂言らしい奇抜な趣向があります。

## 狂言同異

野村 広二

九月は大衆能と日本能楽会公演能があつた。大衆能は回を重ねること八回日本能楽会公演能は、同会々員である重要無形文化財保持者が名古屋で八名を数えるに至つた本年、第一回名古屋公演の実現をみたものです。舞台はひきしまり、それにこたえるような見所の鑑賞ぶりでした。能は、長絹を抱きしめるのに剛直なまでに「松風」(英雄)と前シテが老女物の感じをうけた「安達原、黒頭」(元正)の二番。どちらもハヤシ方は見事だったが地謡の充実が今一杯はしかなかった。他の三流は仕舞(信高、巖、長世)を舞つたが、この方みるべき諸点があつた。狂言は二番のうち名古屋勢の「文山賊」(松、又)の方がみばえがした。それにしても、きょうの登場者から、能界の時代の流れを身にしみ味

つた。さて、今年もイタリア歌劇をテレビでみた(NHK)。「ドン・カルロ」のフィリップ二世の呻吟は景清、エリザベッタ王妃の苦悩はなにか班女松風、求塚と通ずるもののように感じた。「もし天に涙があるならば、わたくしのもとに送ってください。もしよければ、わが涙を神のご座所にお届けください。」のくりかえしは感銘のいたりです。「仮面舞踏会」の進め方は狂言の流れに実によく似ています。

大きな舞台を必要とするオペラと古風な屋根の下、左右に長い、小さな舞台と橋掛を用いる能、狂言との対比は、いまさらながらつきつめてみたい宿題だと思つた。夏から秋にかけての放送は「井筒」(元正)「黒塚」(信高)「実盛」(英雄)「夕顔」(殿)「半部」(粟屋新太郎)。本は、「花」(心七月号、唐木順三ほか座談会)「能の話—坂元雪鳥能評全集」(岡、滝井孝作)「能の今昔」(野々村戒三、木耳社)。「故橋岡久太郎思ふ草」(橋岡久馬氏より寄贈)など。ほか金剛LPレコード頒布の案内をうける。

強剛者(つわもの)伝

(共同者の先輩達、舞台上で大いに笑わせた彼等は、舞台裏でも数多くのエピソードを残してくれました。こゝではその一部を長老達の話として御紹介しましょう)

△伊勢門水 その1▽

話の豊富なことでは先ず門水の右に出る者はないなあ。そう、門水の

まだ若い頃芸者通いに凝つたことがあつてな、色んな人が諫めたんだが一向聞き入れなかつたもんだ。そこで仲間

の医者が或る時門水をよびつけた。門水おそろ／＼出掛けると、もつともらしく診断してから「これはおこりというて誰もが一生に一度はかゝるものだ」と次の間へ通したんだ。そこに据えたお繕にはみよがとそばが盛つてあつたそう。門水がはしでつまもうとしてもふつ／＼に切れてつまめないそこで門水もハツと合点し、みよがは忘れよ、そばは切れよの戒めか、というわけでそれからふつ／＼通うのをやめたといふことだ。そして全快祝いに親類知友を招き、床には柴田芳洲の筆になる余海の図、ツボミ一つない全開の花をいけ、小座敷の床には永平寺管長の安如の二字をかけ、かのおこりの病原から送つてきたメンメンの手紙でグルリと表装し、軸には、くだんの女狐から拝領した化粧の牡丹刷毛の朱軸を応用した。

あとで門水の歌「切ることも忘るゝこともならぬ身にソバとみよがは無体なりけり」

女は旭廓若松町の三朝楼の都大夫とか医師は縁者で漢方医の菅谷順せんその後で大口六兵衛が「中を決して見るな」と云つて御護りしてくれてな、所が「見るな」と云われりや見たくしてようがない、そこで門水の奴、到々開けちまつたんだ。何と中味は門水御執心の芸妓の写真が入れてあつてな、門水は机の抽き出しに大事に秘めて朝夕そいつをながめながら鼻の下を長くしてたわすだ。所が或る日そいつがない

んだよ。あわてゝさがしたんだが見つからない。もしやと思つてごみ箱をさがすと、果して細かく破り捨ててあつた。そこで早速六兵衛に報告したもんだ。「はい、今朝大事の御護りがこんなな破いてごみ箱に捨ててありました。」

十一月の予告

十一月五日	九阜会	午前九時
能 百	田中きんこ	西村 弘敬
能 花	井上 祐一	
能 鉄	植村真太郎	高安 滋郎
能 雁	中尾 齊満	西村 欽也
能 雛	佐藤 秀雄	
能 雛	佐藤卯三郎	井上松次郎
能 鉢	和泉会	井上礼之助
能 松	霞会	
能 安	名古屋大学学生自演能	
能 録	観世会	
能 松	武田太加志	
能 安	佐藤卯三郎	井上 義次
能 間	梅若 六郎	
能 録	佐藤 秀雄	
能 録	山本 博之	
能 録	井上礼之助	
能 録	和泉 保之	井上松次郎
能 録	保之	井上 祐一
能 羽	談交会	
能 羽	早川喜美子	高安 滋郎
能 井	掬水会	
能 井	十一月廿六日	
能 井	芝村 栄枝	
能 望	谷野 傳	

事務用品・印刷  
算盤製造卸

各官衙・学校・会社納入

株式会社 鬼頭商会

名古屋市中村区上笹島町1ノ47 電話(55)1847~1848番

# 狂言

## 狂言人語

寒さがいよ／＼厳しくなつてまいり  
ます。自然界でも木々の木の葉も思  
いの色彩に装いをこらし、冬の厳し  
い寒さを目前につかの間の一刻を豪華  
に飾り立てて芸術を競い合います。

素晴らしい空の青さ、白い雲のすがすが  
しさが、昨日までと同じこの都会の空  
気までを今日は全く澄んだものよう  
な気を与えてくれるから不思議です。  
芸術の秋です。さあ、大きくこの秋を  
腹の底まで吸い込み、心ゆくまで味わ  
って下さい。

さて、この芸術の秋に私共が皆様に  
お贈りするの、十一日の「和泉会」  
です。今回は重文個人指定(人間国宝  
)を受けられ目出たく今秋古稀を迎え  
られた野村万蔵師をお招きしました。  
そしてこの万蔵師に宗家保之師競演の  
「宗論」を中心として松次郎、礼之助  
のコンビに社中総出演の「弓矢太郎」  
など、豪華な曲目を揃えて開催されま  
す。是非御鑑賞下さい。

## 十一月の催能

十一月五日 九草会 午前九時  
能 田中きんこ 西村 弘敬  
能 井上祐一

能 花 籠	植村真太郎	高安	滋郎
能 鉄 輪	中尾 寿満	西村 欽也	
能 雁 磔	佐藤卯三郎	井上松次郎	
十一月十一日	和泉会		
十一月十二日	霞 会		
十一月十八日	名古屋大学能楽研究会		
能 殺 生 石	都築 康夫	高安 滋郎	
能 雁 大名	吉田 耕蔵	加藤 保博	
十一月十九日	観世会 正午始		
能 鉢 木	武田大加志	高安 滋郎	
能 松 風	梅若 六郎	西村 弘敬	
能 安 達 原	山本 博之	西村 欽也	
能 鎌 腹	和泉 保之	井上松次郎	
十一月廿三日	淡交会		
能 羽 衣	早川喜美子	高安 滋郎	
十一月廿六日	柳水会		
能 井 筒	芝村 栄枝	西村 欽也	
能 望 月	谷野 博	高安 滋郎	
能 盆 山	佐藤卯三郎	大野 弘之	

昭和42年11月1日発行  
発行所  
名古屋市中区東門前町5/2  
井上重兵衛方 電(321) 1430  
名古屋狂言共闘社  
印刷所  
有限会社 安井印刷所 電(541) 4881

## 市民芸術祭参加

昭和四十二年十一月十一日  
(土) 午後五時  
第七回 和泉会

墨 塗 大名 佐藤卯三郎 女 井上 祐一

佐渡狐 佐渡百雄 野村又三郎 秀雄 井上松次郎

宗 論 伊土留 野村 万蔵 河村 丘造

弓矢太郎 大野 井上松次郎 大野 弘之

主催 狂言共闘社  
後援 名古屋市教育委員会

## 狂言解説

雁磔||格好ばかしの例の大名。狩に出  
かけ雁に弓矢のねらいをつけたのです  
が通行人に磯でとられてしまいます。  
さあ、おさまらぬ大名はずでに自分が  
狙い殺しておいたといふがかりをつけ  
るのですが…  
鎌腹||妻に頭の上らぬ男、今日もおき  
まりの夫婦げんかの末、鎌で腹をかき  
切つて死のうとしますが…。鎌を構え  
てのシテの一人舞台です。

## 狂言同異

野村 広二

「十月八日、故本田秀男氏追善能で  
光洋君が「海士」を父上にたむける。  
終始安定し、趣のあるできで、さぞか  
し泉下の父君もその上達ぶりを喜ばれ  
たことであろう。十日の金剛会「松  
風」(巖)「黒塚・白頭」(豊嶋豊)  
はともに佳品。この秋は二曲ともあわ  
せて、三回つづ三流でみる事ができ  
る。松風の三回は楽しい。狂言の方は  
「悪太郎」(卯・丘・松)「萩大名」  
(卯・松・礼)「鳴子」(松・礼・祐  
)の三番とも、ていねいに演じて、し  
かもゆとりあり、味もあつて、おかげ  
でこの月は幸いにも狂言の月というこ  
とができます。二十日、横山大観展(日  
経・松坂屋)の「午下り」と「暗香  
浮動」に狂言と能に通うものを見てと  
る。二十一日は、久方ぶりにM教授と  
会食をする。話は、観阿弥と世阿弥の  
相伝と芸風、狂言百号特集、今年の学  
会のことなどうけたまわる。盃を口に  
してほどよくまわつた酔いに街の明る  
さがまぶしかった。翌二十二日は京都  
へ、快晴、例年の時代まつりの当日で  
駅から爽に大変な混雑。大廻りして室  
町の金剛能楽堂につく。「実盛」(弥  
のり)など、前者は重厚で枯木に花、  
後者の格調、どちらも味わい深かった  
し、名古屋から大鼓の河村総一郎青年  
が「竜田」と「天鼓」の二番に活躍し  
たことも特筆したい。さて次の二十三  
日、逢左文庫日本の古典特別展と徳川  
美術館絵巻名品展にいく。文庫には、  
古典略年表に能関係の項目が三つのり  
嵯峨本が「松風村雨」ほか飾られてい  
た(名古屋市・伊藤健氏蔵)。絵巻展

昭和四十二年十二月三日(日) 正午始  
於 熱田神宮 能楽殿

田村 乱能  
後 河村 総一郎  
前 寛 敏一

鬼頭 定男  
吉田 季信  
後 藤 孝一郎  
田 鍋 惣太郎  
野村 又三郎  
池田 昌広

重喜 加藤 良久  
服部 紗枝

熊 坂 鬼頭 喜太郎  
加藤 丈太郎  
助川 竜夫  
大森 英三郎  
後 藤 孝一郎

狸々 乱 藤田 六郎 兵衛  
梅田 滋郎  
高安 友彦  
佐藤 礼一  
井上 祐一

班 女 鬼頭 季信  
吉田 正宜  
衣斐 定男  
助川 竜夫  
鬼頭 喜太郎

寝音曲 福井 啓次郎  
戸田 有賀  
秀雄

小 督 田 鍋 洋一  
西村 河村 総一郎  
竹内 六郎  
青木 恒治  
福井 啓次郎

船弁慶 井上 松次郎  
内藤 泰二  
二井 栄逸  
山口 義郎  
大森 英三郎

後 藤 孝一郎  
野崎 太郎  
池田 茂  
鬼頭 喜太郎  
寛 敏一  
河村 総一郎

◎連絡所 千種区大久手町四ノ一〇  
電話七三一一〇三三六・七四一一三八〇七  
主催 能楽協会名古屋支部  
後援 社団法人名古屋能楽会  
田鍋方

はどれにも驚歎の目を見張る。一遍上人の雪の道行の図は殊に感銘の深かったものの一つ。これにもちようどすばらしい狂言や能をみているとおなじような心の高まりをおぼえた。放送は「日本音楽道しるべ・山姥を扱った邦楽、(一)謡曲山姥」(横道万里雄ほか・NHKラジオ)。「沼州雨能評集」を同氏からおうけしたことをしるしたい。十一月は関西の故善竹弥五郎翁追善狂言会(名古屋からの参加(大般若))と名古屋和泉会に期待したい。

菊 西村 弘 敬

今日此頃は秋も末つかたに近くなり菊の時節となりました。菊は我が皇室では昔から御紋章に用いられて居り、民間では御遠慮申し上げて御紋章は勿論、これに似た紛らはしひ物も伺ひぬ事となつて居る。菊は植物学上では其種類も沢山有る事とは思ひますが、兎に角に匂ひも香ばしく、姿や形も色なども色々々々、我國の草花の中では誠に結構なものと思はれます。殊に寒菊などは其葉色や花の姿など誠に可憐で気高くて、一輪生けなどには滋味深きもの、様に感じます。

我々が日常語つて居る謡曲の中には菊といふ文字は随分沢山に出て来ます。又菊を主題とする曲もある。先づ手近い処では

「狸々」の謡には「菊をたたへてよもすがら」「葉の名をも菊の水」「みきときく」「理りや白菊の」などと幾らもある。菊を主題とした謡の随一は菊童である。此曲は観世以外の流儀では枕童童と呼んで居るが此曲こそは菊の功德をふんだんにたたえて居る様に思はれます。昔支那で周の國の穆王(ぼくおう)に召し使はれて居た童童(少童)が或時過つて皇帝の御枕をまたぎ越へたので、其の科にて山の中へ流し者に捨てられる事になった。其時に皇帝が枕に二句の偈(げ)を書きつけて童童に賜はつた。其の偈は普門品(ふもんぼん)即ち法華經の内の一部で通常觀音經と呼ばれて居る經文の終りの近い部分に偈があり其の内「具一切功德慈眼視衆生、福寿海無量是故応頂礼」此の御枕を持って童童は山の中へ捨てられたが、此文句を菊の葉に一枚づつに書きつけて、之を山から湧き出る泉の水に浮べ浸して其水を飲んで居た。其水が即ち葉の点水となつて知らず知らずの内日月も移り、遂に七百年の永い間生き延びたといふ。誠に以て芽出度い話を謡曲に造られてあるもので、まだ此外色々の謡の中に菊も出て来ると思ひますが一と先づ之れで

十二月の予告

- 十二月三日 乱能
- 十二月十日 宝生会定式能
- 能 俊 寛 野口 緑久
- 能 富士太鼓 倉本 雅
- 十二月十五日 学生鑑賞能
- 能 舟弁慶 金春 欣三 高安 滋郎
- 能 二人大名 佐藤 秀雄
- 能 綱ない 井上松次郎 佐藤卯三郎 井上礼之助

創業天保十二年  
石古屋・信馬町

何と云つても  
はん  
ます  
お茶は升半

名物街 鹿野店 地下鉄栄町 地下街 駅前店 大名古屋ビル 地下街 鹿野店 松坂屋(地階)